大阪府埋蔵文化財調査報告 2017-1

西福井遺跡 Ⅱ

－一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査－

平成 30 年 3 月

大阪府教育委員会

西福井遺跡 Ⅱ

－一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

序　文

西福井遺跡は茨木市西福井三丁目及び東福井二丁目に所在する東西370m、南北680mの拡がりをもつ遺跡です。

この遺跡は、昭和58年に大阪府立福井高等学校新設工事に先立つ発掘調査によって、縄文時代から中世の集落跡および古墳時代中期の古墳群であることが分かっています。

今回の調査は、西福井遺跡を南北に縦断する一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査で、平成28年度に実施したものです。

調査の結果、鎌倉時代の柱穴列や耕作溝などが検出され、その下層からは、縄文時代の土器や石器が出土し、焼けた人骨の入った土坑を検出するなどの成果が得られました。

これらは、西福井遺跡における土地利用の歴史に、新たな知見を加える貴重な成果ということができます。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、地元関係者ならびに大阪府都市整備部、大阪府茨木土木事務所、茨木市教育委員会の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも府内の文化財保護行政により一層のご理解とご協力をお願いいたします。

平成30年３月

大阪府教育庁
文化財保護課長　森屋直樹

例　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて平成28年度に実施した、一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う、茨木市西福井四丁目所在の西福井遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、文化財保護課調査事業グループ課長補佐　橋本高明の指導の下、同主査　岡田賢、　専門員　西口陽一・小林義孝を担当者として実施した。
3．遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ副主査　藤田道子、同専門員　阪田育功を担当者として実施した。
4．発掘調査の調査番号は、16024である。
5．発掘調査に際しては、基準点測量業務を株式会社エイテック大阪支店に委託した。
6．本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7．出土人骨の分析は安部考古動物学研究所に委託し、その結果を第４章に掲載した。また放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を第５章に掲載した。
8．発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
9．発掘調査、遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
10．本書は、300 部を作成し、一部あたりの単価は827円である。

凡　例

1．調査にあたっては、平面直角座標第Ⅵ系を用いた。遺構平面図には、座標値をＸＹ軸について示した。
2．標高は、すべてT.P.（東京湾平均海面）値を使用した。
3．遺構番号は、検出順に番号を付した。
4．本書掲載の遺物（人骨を除く）は、本文挿図、図版写真ともに共通した通し番号を付している。

西福井遺跡Ⅱ

－一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査－

序文・例言・凡例
目次
第１章　調査経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2

第２章　位置と環境 …… 3

第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　基本層序 …… 5
　第２節　検出した遺構 …… 6
　第３節　遺物 …… 11

第４章　縄文時代の火葬人骨について …… 17

第５章　放射性炭素年代測定 …… 25

第６章　総括 …… 28

挿図目次

第１図　調査区と昭和 57・58 年度調査区（斜線部）…… 1
第２図　調査区位置図…… 2
第３図　周辺遺跡分布図…… 3
第４図　調査区中央西壁断面図…… 5
第５図　遺構平面図…… 7
第６図　土坑 010 平面図・断面図…… 8
第７図　土坑 010 出土人骨部位位置図…… 10
第８図　出土遺物実測図・１…… 12
第９図　出土遺物実測図・２…… 13
第 10 図　出土遺物実測図・３…… 14
第 11 図　出土部位模式図…… 19
第 12 図　暦年較正結果…… 27

挿表目次

第１表　遺構一覧表…… 9
第２表　遺物一覧表…… 15 ～ 16
第３表　同定結果一覧表…… 22 ～ 24
第４表　各骨部位の最小個体数…… 24
第５表　放射性炭素年代測定結果…… 26

原色図版目次

原色図版１　西福井遺跡　土坑 010

原色図版２　西福井遺跡　土坑 010 出土人骨

図版目次

図版 １　西福井遺跡　遺構（１）
図版 ２　西福井遺跡　遺構（２）
図版 ３　西福井遺跡　遺構（３）
図版 ４　西福井遺跡　遺構（４）
図版 ５　西福井遺跡　遺構（５）
図版 ６　西福井遺跡　遺構（６）
図版 ７　西福井遺跡　遺構（７）
図版 ８　西福井遺跡　遺構（８）
図版 ９　西福井遺跡　遺物（１）
図版 10　西福井遺跡　遺物（２）
図版 11　西福井遺跡　遺物（３）
図版 12　西福井遺跡　遺物（４）
図版 13　西福井遺跡　遺物（５）
図版 14　西福井遺跡　遺物（６）
図版 15　西福井遺跡　遺物（７）
図版 16　西福井遺跡　土坑 010 人骨（１）
図版 17　西福井遺跡　土坑 010 人骨（２）
図版 18　西福井遺跡　土坑 010 人骨（３）
図版 19　西福井遺跡　土坑 010 人骨（４）
図版 20　西福井遺跡　土坑 010 人骨（５）
図版 21　西福井遺跡　土坑 010 人骨（６）

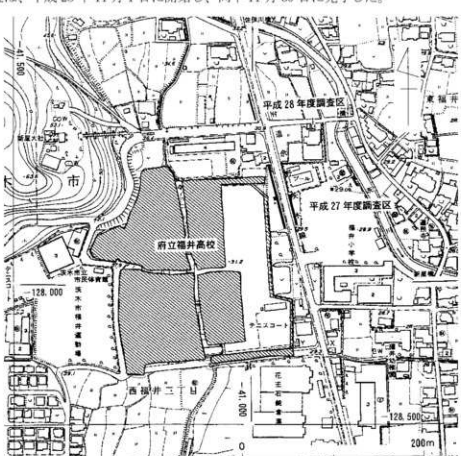
第１章　調査経過と方法

第１節　調査に至る経過

西福井遺跡は、茨木市西福井三丁目から東福井二丁目を中心に、南北 680 m、東西 370 mの範囲に広がる、縄文時代から近世まで継続する複合遺跡である。

今回の発掘調査は、昨年度に引き続き一般府道余野茨木線の歩道設置工事に伴うものである（第１図）。当該工事の事業者である大阪府茨木土木事務所と大阪府教育庁は、平成 27 年度に新屋坐天照御魂神社参道の北側に位置する工事予定地（茨木市西福井四丁目）の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、歩道設置工事の施工範囲の中の埋蔵文化財が損壊を受ける府道西側の擁壁設置部分について、平成 28 年度の工事施行前に本発掘調査を行うこととした。なお、この擁壁とは、コンクリート製の重力式擁壁のことで、府道の高さが現地表面より高く、道路面と同じ高さの歩道を設置しようとすると、官民の用地境界に必要なものである。擁壁を設置するため、擁壁の基礎部の幅の分と工事用の余掘りの分を合わせた部分の面積が発掘調査の対象となった訳である。

本発掘調査は、平成 28 年 11 月 1 日に開始し、同年 11 月 30 日に完了した。



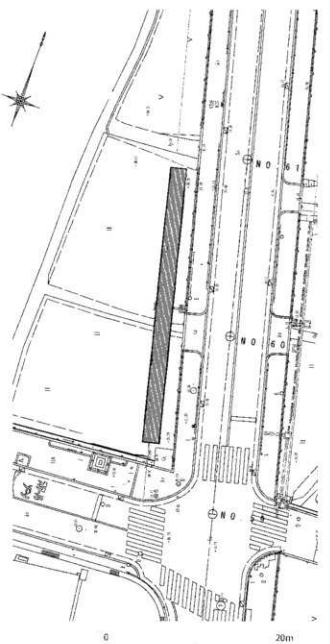
第１図　調査区と昭和 57・58 年度調査区（斜線部）

第２節　調査の方法

今回の調査区は、府道余野茨木線と新屋坐天照御魂神社の参道が交差する交差点の北西側にある。調査区の形状は、幅 1.8 m長さ 30 mの細長い調査区である（第２図）。調査区の東側と南側は盛土された現代の道路であり、西側・北側は現道部分より１m低い水田である。したがって、今回の調査は南側の歩道側に敷鉄板を設置して進入路および工事ヤードを確保して実施しなければならなかった。機械や人力による掘削土は、トラックで場外に搬出し、頻繁な交通事情を配慮して交通誘導員を配置し、安全対策・清掃等に努めた。また、西側水田を部分的に借地し、監督員詰所や発掘資材等置場を設置した。

調査区の地区割りは、調査区中央部に北側が高く南側が低い段差があることから、段から北をＡ区、段から南をＢ区、調査区南端をＣ区とした。

発掘調査は、北側から開始し、最後に南端部を調査した。掘削については、現代の約 0.３m程の厚みのある耕作土と床土を機械で除去した後、複数の遺構面の精査を人力で繰り返しながら、6.L.−1.２mの深さまで実施した。各遺構面では随時写真撮影を行ない、遺構実測は手書きによる平板測量で行なった後に平面直角座標測量を行ない、遺構図に取り付けた。



第２図　調査区位置図

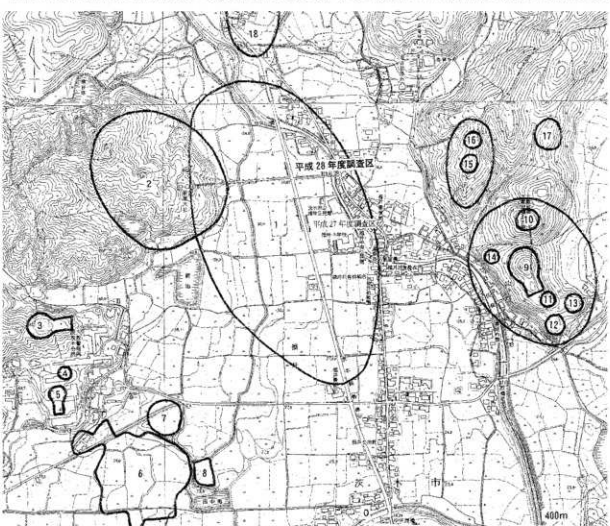
第２章　位置と環境

茨木市は、大阪府北部の三島地域に位置し、南北に長い市域を持っている。地形的には、北から北摂山地、山地から派生する丘陵部、大阪平野の一部をなす三島平野が広がっている。また、北摂山地を源とし、市域を南北に流れる安威川、佐保川、茨木川などによって形成された段丘地形がみられる。

西福井遺跡（第３図の１）は茨木市のほぼ中央部、地形が丘陵部から平野部にかわる地点に所在し、佐保川右岸の沖積地から低位段丘にかけて立地する。東西約 370 m、南北約 680 mの拡がりをもつ遺跡で、昭和 57 年に大阪府立福井高等学校新設に先立つ試掘調査によって発見された。調査の結果、縄文時代から中世の集落跡及び古墳時代中期の古墳群が発見されている。

この西福井遺跡周辺には、多くの遺跡や古墳が発見されている（第３図）。

西福井遺跡北西部の宮山には、全壊した古墳もあるが、30 基以上の古墳が確認された古墳時代後期



1、**西福井遺跡**　2、新堤古墳群　3、紫金山古墳　4、青松塚古墳　5、南塚古墳　6、福井遺跡　7、海北塚北方遺跡　8、海北塚古墳　9、将軍山古墳　10、将軍塚古墳　11、将軍山古墳群３号墳　12、将軍山古墳群４号墳　13、将軍山古墳群５号墳　14、将軍山古墳群７号墳　15、真龍寺第１号古墳　16、真龍寺第２号古墳　17、将軍山第１地点遺跡　18、福井城跡

第３図　周辺遺跡分布図

の新屋古墳群（２）があり、式内社の新屋坐天照御魂神社が鎮座している。

西福井遺跡の西側には、標高 65 mの丘陵上に府指定史跡である古墳時代前期の紫金山古墳（３）がある。紫金山古墳は、全長約 110 mの前方後円墳で、主体部である竪穴式石室から三角縁神獣鏡を含む 12 面の銅鏡や碧玉製腕飾などの副葬品が検出されている。副葬品の中には、直孤文の描かれたゴホウラ製貝輪や径 36 cmもある勾玉文鏡など珍しいものも多いが、中でも鉄製品の多いのが特徴である。短甲・刀などの武具、馬鍬・鎌などの農具、鋸・斧などの工具、銛などの漁具まで納められていた。

紫金山古墳の南側には、横穴式石室から画文帯神獣鏡や乳文鏡・玉類・農工具・馬具・須恵器などの副葬品が出土した古墳時代後期の円墳である青松塚古墳（４）がある。

青松塚古墳の南側には、古墳時代後期の墳丘長 50 mほどの前方後円墳である南塚古墳（５）がある。主体部である横穴式石室から時期や形式の異なる凝灰岩製の組合式石棺が２基検出され、棺外から三組の馬具と共に一千本にも達する大量の鉄鏃・鉄矛・挂甲・衝角付冑などの副葬品が出土した。

紫金山古墳や南塚古墳のある丘陵の南東部の傾斜地には、弥生時代後期にはじまり、古墳時代後期以降の集落跡でもある福井遺跡（６）や海北塚北方遺跡（７）がある。

福井遺跡の東には、古墳時代後期の府指定史跡である海北塚古墳（８）がある。この古墳は、段丘の端に築かれた古墳で、大型の横穴式石室内に緑泥片岩製の組合式石棺が検出され、棺外から金銅製龍文環頭柄頭や馬具・須恵器などの副葬品が多数出土している。

西福井遺跡の東側の丘陵上には、宅地開発で消滅してしまい、石室だけが移築されている古墳時代前期の前方後円墳である将軍山古墳（９）がある。将軍山古墳は、標高 64 mの丘陵上にある全長 107 mの前方後円墳で、主体部である竪穴式石室から硬玉製勾玉やガラス小玉・銅鏃・鉄鏃・鉄剣・鉄刀・鉄釣針・短甲などの副葬品が検出されている。

将軍山古墳の近辺には、藤原鎌足墓と伝えられている古墳時代後期の将軍塚古墳（10）や主体部が横穴式石室の将軍山３号（11）・４号（12）・５号（13）・７号墳（14）などがある。

将軍塚古墳の北方に、谷を隔てて古墳時代後期の真龍寺１号墳（15）・２号墳（16）があり、同じ丘陵上には、弥生時代後期の壺棺などの検出された将軍山第１地点遺跡（17）がある。

西福井遺跡の北側には、建武元年（1334）楠木正成が西国街道や丹波街道の要衝を守るために築き、のちに守護細川氏の拠城となったと伝える福井城（18）があった。

このように、この西福井遺跡周辺には、幾つもの重要な遺跡や古墳が密集して発見されており、その中心位置に西福井遺跡が存在していると指摘できる。

なお、昭和 57・58 年度および平成 27 年度の西福井遺跡の調査結果については、平成 29 年に刊行された西福井遺跡の報告書（註）に詳しい。

（註）　大阪府教育委員会　2017『西福井遺跡－一般府道余野茨木線歩道設置工事に伴う発掘調査－』
大阪府埋蔵文化財調査報告 2016 － 2

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

調査区中央部にある現在の水田畦畔周辺の東壁断面図（第４図）によって、層序の説明を行う。

近・現代の染付磁器片などを含む表土は、厚さ35㎝程の近代～現代耕土および床土である。現在の水田畦畔の北側は高く、南側は低い。段差は約30㎝である。その耕土・床土の下にある①層は、厚さ10㎝程の黄灰色シルトで、中世の土師器小皿片などが含まれていた。中世～近世の水田耕土層と考えられた。①層の下にある②層は、厚さ５㎝程の褐色シルトで、①層と同様に水平に堆積していて、酸化鉄の沈着も顕著なことから中世～近世の床土と考えられた。

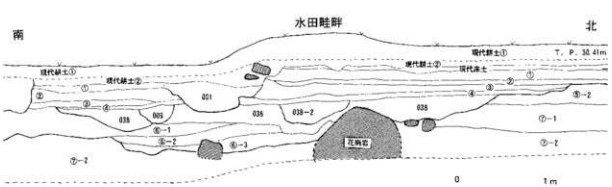
②層の下にある③層は、現代の水田畦畔から北に２ｍの部分から南側の部分にのみ検出された層で、北側には存在しなかった。厚さ５㎝～25㎝の③層は暗灰黄色シルトで、水平に堆積し、土師器小皿や東播ねり鉢などの中世土器が出土した。中世の水田耕土層と考えられた。③層の下にある④層は、厚さ５～10㎝の暗灰黄色シルトで、酸化鉄の沈着も顕著なことから、中世の床土と考えられた。

⑤－１層は、現在の水田畦畔から北に3.7ｍの部分から北側の部分にのみ検出された層で、南側には存在しなかった。厚さ７～25㎝の黒色土で、その上部に酸化マンガンの沈着が顕著であった。

⑤－２層は、現在の水田畦畔から北に1.1ｍの部分から北側の部分にのみ長さ７ｍにわたって検出された層で、南側には存在しなかった。厚さ20㎝の黒褐色土で、⑤－１層・⑤－２層は共に遺物は出土しなかったが、西福井遺跡の第１次及び第２次調査の成果から縄文時代の堆積層と考えられた。

⑥層は、現在の水田畦畔から南側のみで検出された層で、厚さ30㎝までの黄灰色砂層である。縄文土器や弥生土器、古墳時代前期の土師器などが含まれていた。

⑦層は、灰黄色の砂層で、50～70㎝以上の厚さが確認された。この砂層中には大小様々な花崗岩の丸石が含まれていた。平行ラミナも認められたことから自然流路内堆積と考えらえた。



第４図　調査区中央西壁断面図

第２節　検出した遺構

（１）第１面

第１面は、中世後期の遺構面である（第５図）。

溝 001　B区で検出した溝である。長さ 1.5 m以上、幅 1.1 m、深さ 0.33 m、埋土は灰色砂質土。方向は東西方向である。埋土から平安時代の黒色土器椀や鎌倉時代の瓦器椀・瓦質羽釜・土師器小皿片などが出土した。中世の水田畦畔の南側に設置された溝と考えられた。

小ピット群（002 ～ 005）　A区で一列に 0.8 mの間隔で並ぶ三つの小ピットとその東側が調査区外にある小ピット一つを検出した。一列に並ぶ小ピットの大きさは、径 0.25 ～ 0.31 m、深さは 0.38 ～ 0.54 mで、小ピット 005 は、径 0.26 m、深さは 0.14 m以上である。埋土は、いずれも灰黄褐色土である。002・003 から、瓦器椀や土師器小皿片が出土した。三つに並ぶ小ピット列の方向は南北方位と合致している。柱痕は検出されなかったが、小さな掘立柱建物の存在が推定された。

井戸 006　A区で検出した素掘りの井戸である。その大半が東側の調査区外にある。長さ 1.44 m以上、深さは 0.8 m以上である。①層を切って掘削されているので、近現代の井戸と考えられた。

溝 007　B区で検出した東西方向の溝である。長さ 1.1 m以上、幅 0.33 m、深さ 0.06 m、埋土は暗灰黄色土である。土師器片が出土した。

溝 008　B区で検出した東西方向の溝である。長さ 0.54 m以上、幅 0.24 m、深さ 0.04 m、埋土は暗灰黄色土である。弥生土器や平安時代の土師器片などが出土した。溝 007・溝 008 は、共にその東端が調査区内で途切れていて、中世の田圃に伴う畝溝と考えられた。

（２）第１面下層

調査区中央部の段周辺のみで、第１面の下層で遺構が検出された（第５図）。

溝 009　B区で検出した東西方向の溝である。長さ 1.5 m以上、幅 0.39 m、深さ 0.21 m、埋土は灰黄褐色土である。サヌカイト剥片２点が出土した。④層の下から検出されたので、中世の田圃に伴う溝と考えらえた。

土坑 046　溝 009 の南側 4.2 mの箇所で、径 0.45 m、深さ 0.27 mの土坑が検出された。黒色土が充満していて、遺物は出土しなかったが、縄文時代の遺構と考えられた。

（３）第２面

第２面は、中世の遺構面である（第５図）。ただし、中世の遺構埋土は灰黄褐色土であるのに対し、埋土が黒色土である遺構は、縄文時代の遺構と考えられた。両者の遺構が第２面において同時に検出された。

土坑 010　A区で検出した長方形の土坑である（第６図）。第１面の遺構検出時に、すでにその上面が顔を出しており、骨片がいくつも現れていた。すなわち、本遺構は中世の水田造成時に、その上部が大きく削平されていたことが推定された。

骨が発見されたことで、調査区を東側に拡張した。土坑の長さは 1.3 m、幅 0.75 m、深さ 0.24 m、埋土は黒色土である。土坑の底はほぼ平らで、底５㎝程は、骨をほとんど含んでいなかった。埋土中には、焼けて白くなった骨片が充満しており、下層ほど骨の残りが良く、量も多かった。骨に混じって、小さ

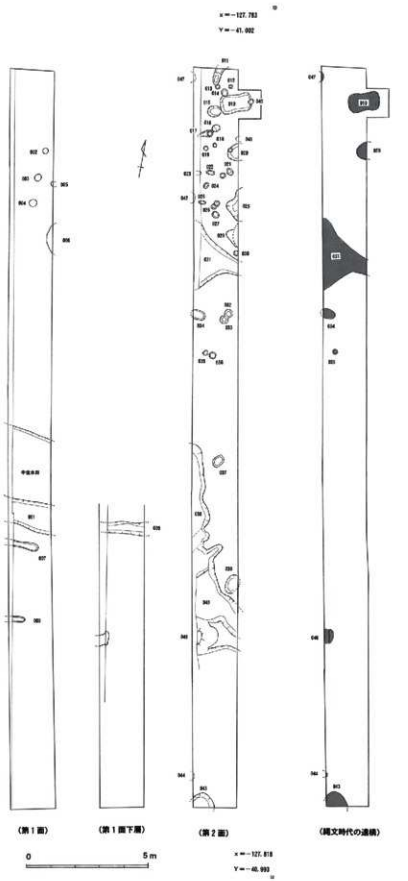
な縄文土器片、サヌカイト片、紅簾石片岩片が出土した。骨は土坑の壁際にまで、乱雑に投棄されたような状況で検出された。上層の骨ほど、白くもろく、なっていた。検出時の状況や同定された骨の部位（第４章参照）の位置関係からは（第７図）、骨を部位によってまとめたとか、人為的に並べたような形跡は認められなかった。

土坑の埋土中から出土した土器細片の中には、縄文時代早期末～前期初頭の爪形文や条痕文の土器と共に後期の縁帯文土器が含まれていたので、土坑の時期は縄文時代後期と判明した。

土坑011　A区で検出した南北方向の細長い土坑である。その北側は調査区外に伸びていた。長さ0.75 m、幅0.39 m、深さ0.22 m。埋土は、灰黄褐色土。遺物は出土しなかった。

土坑015　A区で検出した楕円形土坑である。その東側は、土坑010を切っていた。長さ0.55 m、幅0.47 m、深さ0.58 m。埋土は、灰黄褐色土。埋土から、鎌倉時代の瓦器椀、土師器鉢、土師器小皿片などが出土した。

土坑020　A区で検出した楕円形土坑である。その東側

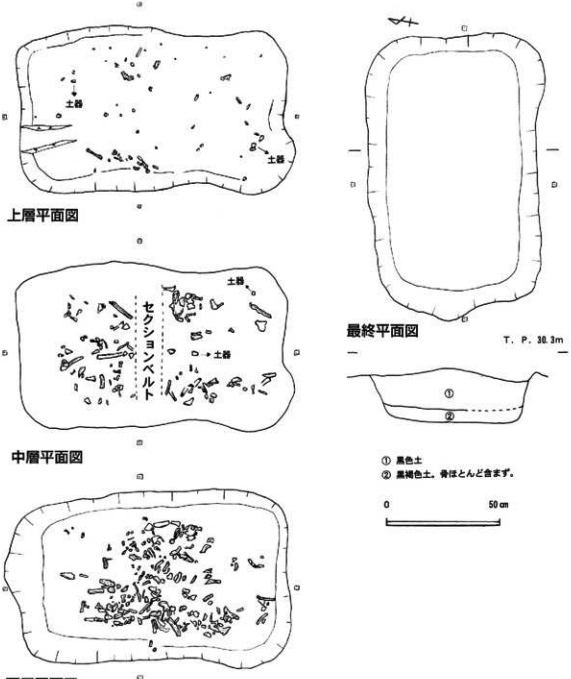


第５図　遺構平面図

は調査区外である。長さ0.81 m、幅0.42 m以上、深さ0.34 m。埋土は、黒色土。遺物は出土しなかった。

土坑025　A区で検出した不整形形土坑である。その東側は、土坑010を切っていた。長さ1.3 m以上、幅0.47 m以上、深さ0.62 m。埋土は、灰黄褐色土。埋土から、須恵器壺・瓦器椀・土師器小皿片、炭片などが出土した。鎌倉時代の土坑と考えられた。

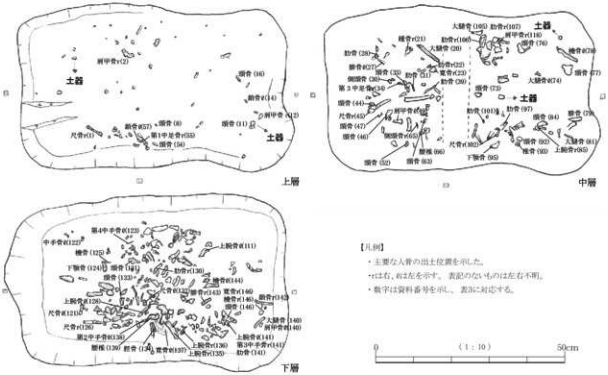
土坑029:　A区で検出した楕円形土坑である。その北側は、井戸006で切られていた。長さ0.75 m以上、



第6図　土坑010平面図・断面図

第１表　遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	法量（m）			埋土	出土遺物	種類	時期
			長さ	幅	厚さ				
００１	C	1	1.50 以上	1.10	0.33	灰色砂質土	黒色土器・瓦器・土師器	溝	中世
００２	A	1	0.25	0.25	0.43	灰黄褐色土	瓦器・土師器	ピット	〃
００３	A	1	0.29	0.29	0.38	〃	土師器	〃	〃
００４	A	1	0.31	0.31	0.54	〃	〃	〃	〃
００５	A	1	0.26	0.08 以上	0.14 以上	〃		〃	〃
００６	A	1	1.44 以上	0.09 以上	0.80 以上	明黄褐色		井戸	近現代
００７	C	1	1.10 以上	0.33	0.06	暗灰黄色土	土師器	溝	中世
００８	C	1	0.54	0.24	0.04	〃	弥生土器・土師器	〃	〃
００９	C	1 下層	1.50 以上	0.39	0.21	灰黄褐色土	サヌカイト剥片	〃	〃
０１０	A	2	1.30	0.75	0.24	黒色土	骨・縄文土器・サヌカイト剥片	土坑	縄文
０１１	A	2	0.75	0.39	0.22	灰黄褐色土		〃	中世
０１２	A	2	0.15	0.15	0.16	〃		ピット	〃
０１３	A	2	0.18	0.18	0.28	〃	土師器	〃	〃
０１４	A	2	0.28	0.28	0.42	〃	瓦器・土師器	〃	〃
０１５	A	2	0.55	0.47	0.58	〃	弥生土器・瓦器・土師器	〃	〃
０１６	A	2	0.22	0.30	0.30	〃	土師器	〃	〃
０１７	A	2	0.42 以上	0.30	0.30	〃	土師器	〃	〃
０１８	A	2	0.17	0.15	0.19	〃	土師器	〃	〃
０１９	A	2	0.19	0.19	0.32	〃		〃	〃
０２０	A	2	0.81	0.42 以上	0.34	黒色土		土坑	縄文
０２１	A	2	0.24	0.22	0.26	灰黄褐色土		ピット	中世
０２２	A	2	0.38	0.18	0.07	〃	瓦器・土師器	〃	〃
０２３	A	2	0.05 以上	0.15	不明	〃		〃	〃
０２４	A	2	0.24	0.17	0.08	〃		〃	〃
０２５	A	2	1.30 以上	0.47 以上	0.62	〃	須恵器・瓦器	土坑	〃
０２６	A	2	0.18	0.18	0.15	〃		ピット	〃
０２７	A	2	0.22	0.27	0.45	〃		〃	〃
０２８	A	2	0.28	0.13	0.14	〃	瓦器・土師器	〃	〃
０２９	A	2	0.75 以上	0.50 以上	不明	〃		土坑	〃
０３０	A	2	0.20	0.20 以上	0.18	〃		ピット	〃
０３１	A	2	2.70	1.60 以上	0.38	黒色土		土坑	縄文
０３２	B	2	0.48	0.48	0.23	灰黄褐色土	須恵器・土師器	ピット	中世
０３３	B	2	0.45	0.45	0.20	〃		〃	〃
０３４	B	2	0.50 以上	0.42	0.38	黒色土		土坑	縄文
０３５	B	2	0.22	0.22	0.06	〃		ピット	〃
０３６	B	2	0.28	0.28	0.47	灰黄褐色土		〃	中世
０３７	B	2	0.43	0.37	0.10	〃		土坑	〃
０３８	B	2	4.50 以上	0.78 以上	0.28	灰黄褐色細砂	縄文土器・弥生土器・土師器	河川	縄文～古墳
０３９	B	2	0.80	0.50	0.10	灰黄褐色土		土坑	中世
０４０	C	2	4.00	1.00	0.30	黄灰色砂	縄文土器・弥生土器・石器・土師器	河川	縄文～古墳
０４１	A	2	0.19	不明	0.32	灰黄褐色土		ピット	中世
０４２	A	2	0.60	不明	0.84	〃	土師器	土坑	〃
０４３	C	2	0.63 以上	0.90 以上	0.38	黒色土		〃	縄文
０４４	C	2	0.25	不明	0.25	〃		〃	〃
０４５	A	2	0.22	0.22	0.32	灰黄褐色土	骨・土師器	ピット	中世
０４６	C	1 下層	0.45	0.38 以上	0.27	黒色土		土坑	縄文
０４７	A	2	0.40	不明	0.33	〃		〃	〃



第７図　土坑 010 出土人骨部位位置図

幅 0.5 m以上。埋土は、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 031　A区で検出した不整形な土坑である。西側では、幅 2.7 m、東側では幅 0.64 m、長さ 1.6 m以上、深さ 0.38 m。埋土は、黒色土。遺物は出土しなかった。

土坑 034　A区で検出した楕円形土坑である。その西側は調査区外である。長さ 0.5 m以上、幅 0.42 m、深さ 0.38 m。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 037　A区で検出した楕円形土坑である。長さ 0.43 m、幅 0.37 m、深さ 0.1 m。埋土は、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 039　B区で検出した楕円形土坑である。長さ 0.8 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m。埋土は、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 043　C区で検出した円形土坑である。長さ 0.63 m以上、幅 0.9 m以上、深さ 0.38 m。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 044　C区の西側壁面で検出した土坑である。長さ 0.25 m、深さ 0.25 m。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 047　A区の西側壁面で検出した土坑である。長さ 0.4 m、深さ 0.33 m。埋土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

ピット群　A区北半部で固まって検出された。各ピットの法量等は、第１表遺構一覧表に掲載されている。各ピットの埋土は灰黄褐色土で、ピット 013・016・017・018・032・042・045 からは、平安・鎌倉時代の土師器小皿などが出土し、ピット 014・022・028 からは、鎌倉時代の瓦器椀などが出土した。ピット 012・019・021・023・024・026・028・030・033・035・036・041 から遺物は出土しなかった。

これらのピットは、調査区の幅が狭いため、どう組み合わさって中世の建物跡となるかは、不明であった。

河川038　B区で検出された。その西側は調査区外である。長さ4.5m以上、幅0.78m以上、深さは0.28m。埋土は、上部は灰黄褐色細砂で、下部は暗灰黄褐色細砂で、河川堆積のように思われた。埋土中から、縄文土器や弥生土器・土師器片などが出土した。蛇行する河川の一端を調査した可能性がある。

河川040　B区で検出された。北西から南東にかけての流路跡と考えられた。長さ４m、幅１m、深さは0.3m。埋土の上層は黄灰色砂層、中層は灰黄褐色砂層、下層は黄灰色砂層であった。埋土中から、縄文土器・弥生土器・古墳時代前期の土師器に混じって、縄文時代の楔形石器や弥生時代のサヌカイト製石鏃などの遺物も多数出土した。色々な時代の色々な遺物が混在していることから、恐らく調査地の北西側、丘陵裾部に当時の集落跡があって、洪水等により、集落の一部が押し流されてきた結果と推測された。

第３節　遺物

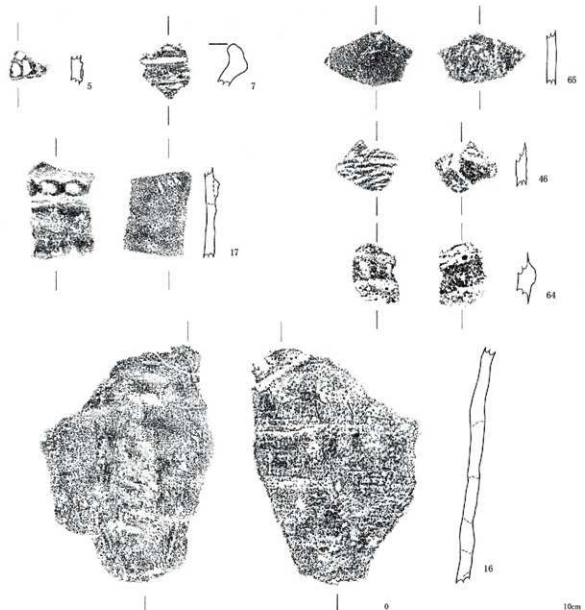
今回の発掘調査では、28リットル入りのコンテナで５箱の遺物が出土した。内、３箱は骨で、２箱が土器・石器である。狭い調査区であったが、遺物量は多いと指摘できる。土器はすべて破片であったが、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉時代と多岐にわたっていた。その他、石器、鉄製品も出土している（第８～10図、図版９～15）。

土坑010からは、縄文土器が出土した。１は内外面とも条痕文、２は外面に植物繊維で筋状の文様を２本つけている。３・４・８・10～15は無文で、５は爪形文、６・９は口縁端部で、９の外面には横方向の条痕がある。７は沈線文で、縁帯文土器である。14は生駒西麓の土器である。１・２・５は、縄文時代早期末～前期初頭の土器で、７は後期である。したがって、土坑010の埋土から新旧の土器が混在して出土したことになり、結局、土坑010の埋った時期は縄文時代後期以降と判断された。

河川040からは、縄文時代晩期の篠原式の深鉢片（16）と突帯文土器（17）が出土した。共に角閃石や金雲母を大量に含み、茶褐色の生駒西麓の土器である。16には、土器の内外面に刷毛痕が３箇所以上付いており、縄文時代晩期中葉に米のあった証拠となる。18～20は弥生時代前期の土器で、18は甕口縁部で、刻み目と沈線が一条施されている。19はヘラ描き沈線を重ねた壺である。20はヘラ描き直線文・波状文の施された壺で、珍しい。21～27は、弥生時代前・中期の土器である。21は高坏脚部で、22は中期初頭の壺口縁部で、21・22には刻み目、23には櫛描き直線文が施されている。24は厚い壺底である。25は弥生時代前期の甕口縁部で、26・27は鉢口縁部、28は壺蓋である。29～35は、弥生時代後期の土器である。29・30は甕で、30には叩き目が外面に施されている。31は受け口状の鉢口縁部で、32・33は鉢の底部である。34・35は高坏で、34には土器焼成前の穿孔がある。36～44は、弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。36・37は、叩き目の施された甕で、38は庄内式の甕口縁部である。39は、内面がヘラ削りされた、口縁部が立ち上がる甕である。40・41は布留式の甕口縁部である。42は小形丸底壺の口縁部で、44は高坏脚部である。

45～47は、５層上面出土の土器で、条痕が外面に施された生駒西麓の深鉢（46）と瓦器椀（45）や叩き目の付いた甕（47）が混在して出土した。

48～50は、４層出土の土器で、縄文時代中期の鷹島式土器（50）と弥生時代中期初頭の壺口縁部（48）



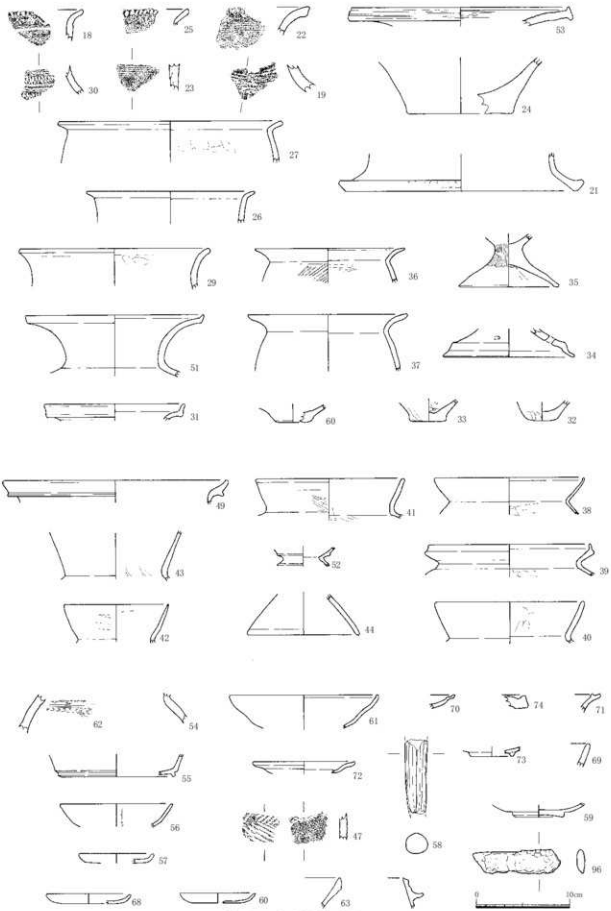
第８図　出土遺物実測図・１

と古墳時代前期の複合口縁壺（49）が混在して出土した。

51 ～ 58 は、３～５層出土の土器で、53 は弥生時代中期の口縁端部に櫛描直線文が施された壺である。51 は弥生時代後期の広口壺で、52 は古墳時代前期の鼓形器台である。54 は、古墳時代後期の須恵器甕で、55 は奈良時代の須恵器坏である。56 は、鎌倉時代の瓦器椀で、57 は土師器小皿で、58 は瓦器三足の脚部片である。

59 ～ 63 は、１層出土の土器で、59 は平安時代の緑釉皿を真似た土師器皿である。60 は平安時代の土師器小皿で、61 は口縁端部内面に沈線が一条施された平安時代の土師器椀である。62 は古墳時代後期の須恵器甕片で、63 は鎌倉時代の東播系ねり鉢である。

また、人力掘削の排土中から、幅広な低い突帯文の付いた縄文土器（64）や生駒西麓の縄文土器（65）、外面に叩き目の施された弥生土器後期の甕（66）なども採集されている。



第9図　出土遺物実測図・2

67 ～ 75 は、遺構出土土器である。67 は、溝 001 出土の瓦器羽釜である。68 は、ピット 004 出土の土師器小皿である。69 ～ 71 は、土坑 010 の上面で検出された土師器鉢（69）、坏（70）、不明（71）である。72 は、ピット 13 出土の土師器皿である。73 はピット 017 出土の土師器椀である。74 は、土坑 025 出土の須恵器壺である。75 は、河川 038 出土の生駒西麓の縄文土器深鉢である。

76 ～ 95 は、石器である。76 ～ 79 は、河川 040 出土のサヌカイトで、76 は外面が灰色に風化した石錐で、縄文時代のものと推定される。77 は柳葉形の弥生時代の石鏃で、78 は楔形石器、79 は剥片である。80 は黒色粘板岩の破片で、著しく磨滅している。恐らく、石庖丁の破片と推定される。81・82 は溝 009 出土のサヌカイト剥片で、灰色に風化している。

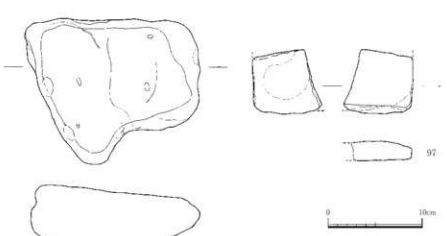
83 ～ 89 は、土坑 010 出土で、骨の洗い出しの際、発見されたものである。石器は、サヌカイト剥片が 5 点（84 ～ 89）と紅簾片岩石鋸（83）が出土した。サヌカイトは、肉眼では二上山と思われ、近くで石器製作のなされていたことが推定された。紅簾片岩石鋸は縄文時代のものとしては珍しく、硬い骨角器の製作等に使用されたものか。

90 ～ 95 は、排土中から採集されたもので、90 は金山のサヌカイト製打製石庖丁か楔形石器で、上下端が著しく磨滅していて、白く変色している。91・92 は二上山のサヌカイト製楔形石器である。93 ～ 95 は二上山のサヌカイト剥片である。

96 は、5 層の上面で検出された中世の鉄刀の切っ先部分である。

97 は、3・4 層から出土した灰色砂岩製砥石の破片である。

98 は、排土中から採集された縄文時代の砂岩製石皿である。



第 10 図　出土遺物実測図・3

第２表　遺物一覧表（１）

番号	種類	器種	法量				色調	時代	出土遺構・層位	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）				
1	縄文土器	深鉢	2.7	4.6	0.6	4.9	灰茶色	縄文早期～前期	土坑 010	条痕文
2	〃	〃	2.3	3.5	0.7	6.4	暗茶褐色	〃	〃	生駒西麓
3	〃	〃	1.8	2.9	0.7	4.2	暗灰褐色	〃	〃	
4	〃	〃	1.9	2.8	0.8	2.9	茶灰色	〃	〃	
5	〃	〃	1.7	2.2	0.6	1.6	灰茶色	〃	〃	爪形文
6	〃	〃	1.1	1.2	0.8	0.8	暗灰褐色	〃	〃	
7	〃	〃	2.3	2.7	1.0	6.1	茶褐色	縄文後期	〃	縁帯文
8	〃	〃	2.0	2.6	0.8	3.3	灰茶色	縄文早期～前期	〃	生駒西麓
9	〃	〃	1.5	1.5	0.6	1.1	茶褐色	〃	〃	生駒西麓・条痕文
10	〃	〃	1.7	2.2	1.0	2.9	暗灰茶色	〃	〃	
11	〃	〃	2.7	3.3	0.8	6.3	灰茶色	〃	〃	
12	〃	〃	1.7	2.6	0.8	3.0	灰色	〃	〃	
13	〃	〃	1.8	2.8	0.7	2.8	暗灰褐色	〃	〃	
14	〃	〃	2.3	2.6	0.7	3.5	暗茶褐色	〃	〃	生駒西麓
15	〃	〃	1.5	1.8	0.5	1.6	暗灰茶色	〃	〃	
16	〃	〃	12.7	9.2	0.9	99.3	茶褐色	縄文晩期	河川 040	生駒西麓・粗頸
17	〃	〃	4.9	3.7	0.6	16.1	〃	〃	〃	生駒西麓・突帯文
18	弥生土器	甕	3.2	4.8	0.7	11.1	灰茶色	弥生前期	〃	
19	〃	壺	4.0	5.2	1.1	20.2	橙色	〃	〃	沈線文
20	〃	〃	3.2	3.8	0.7	8.5	暗灰色	〃	〃	
21	〃	高坏	4.2	9.5	0.7	49.4	灰褐色	弥生中期	〃	
22	〃	壺	3.2	5.1	0.9	25.5	灰色	〃	〃	
23	〃	〃	3.3	5.0	1.0	15.0	〃	〃	〃	
24	〃	〃	5.5	7.8	2.1	181.9	暗灰色	〃	〃	
25	〃	甕	2.0	3.9	0.7	6.6	灰褐色	弥生前期	〃	
26	〃	鉢	3.3	6.5	0.7	19.1	灰色	〃	〃	
27	〃	〃	4.5	7.2	0.7	41.3	〃	〃	〃	
28	〃	蓋	3.1	5.6	0.6	10.4	茶褐色	〃	〃	生駒西麓
29	〃	壺	4.3	6.9	0.7	32.4	灰茶色	弥生後期	〃	
30	〃	甕	5.9	5.4	0.6	23.1	茶褐色	〃	〃	生駒西麓・叩き目
31	〃	鉢	2.2	7.1	0.6	14.7	灰色	〃	〃	
32	〃	〃	2.5	5.7	0.7	41.3	茶褐色	〃	〃	
33	〃	〃	2.4	4.7	1.2	26.6	灰色	〃	〃	
34	〃	高坏	2.7	5.5	0.9	34.8	茶褐色	〃	〃	生駒西麓
35	〃	〃	6.5	5.0	0.7	89.6	〃	〃	〃	生駒西麓
36	〃	甕	3.8	5.0	0.5	16.8	〃	〃	〃	生駒西麓・叩き目
37	〃	〃	6.3	5.8	0.6	27.0	茶灰色	〃	〃	叩き目
38	土師器	〃	3.8	4.7	0.3	9.4	橙灰色	古墳前期	〃	庄内式
39	〃	〃	2.9	7.4	0.4	28.6	茶色	〃	〃	内面ヘラ削り
40	〃	〃	3.0	5.3	0.5	21.3	灰茶色	〃	〃	布留式
41	〃	〃	3.7	5.1	0.5	22.7	茶灰色	〃	〃	
42	〃	壺	2.3	3.7	0.5	9.7	灰茶色	〃	〃	
43	〃	〃	3.8	5.1	0.5	23.4	〃	〃	〃	
44	〃	高坏	5.0	5.1	0.7	17.7	〃	〃	〃	
45	瓦器	椀	2.2	4.0	0.2	2.9	暗灰色	鎌倉	5層	暗文
46	縄文土器	深鉢	3.0	3.5	0.5	4.8	暗茶褐色	縄文	〃	生駒西麓
47	瓦質土器	甕	3.5	4.9	0.7	13.9	暗灰褐色	中世	〃	叩き目
48	弥生土器	壺	3.7	3.3	0.8	18.3	灰黄色	弥生中期	4層	
49	土師器	〃	2.8	4.9	0.7	16.0	灰褐色	古墳前期	〃	複合口縁

第２表　遺物一覧表（２）

番号	種類	器種	法量				色調	時代	出土遺構・層位	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）				
50	縄文土器	深鉢	4.8	5.2	1.4	45.6	灰褐色	縄文中期	4層	五角形
51	弥生土器	壺	6.0	11.0	0.8	116.8	橙灰色	弥生後期	3～5層	
52	土師器	器台	2.8	6.0	0.3	35.7	灰茶色	古墳前期	〃	
53	弥生土器	壺	1.6	8.2	0.9	48.0	〃	弥生中期	3・4層	櫛描直線文
54	須恵器	甕	3.7	4.2	0.9	15.5	暗灰青色	古墳後期	〃	
55	〃	杯	2.5	4.0	0.4	11.5	暗灰色	奈良	〃	
56	瓦器	椀	2.6	4.3	0.3	6.3	〃	鎌倉	〃	
57	土師器	小皿	1.0	3.5	0.5	7.7	灰茶色	〃	〃	
58	瓦器	三足鍋	7.6	2.0	2.0	35.7	黒灰色	〃	〃	
59	土師器	皿	1.5	7.0	0.5	39.9	橙灰色	平安	1層	
60	〃	小皿	1.3	4.3	0.3	5.7	〃	鎌倉	〃	
61	〃	椀	2.8	6.9	0.4	16.7	〃	平安	〃	〃
62	須恵器	甕	4.4	5.2	1.0	37.8	暗灰色	古墳後期	〃	沈線・波状文
63	〃	ねり鉢	2.8	3.3	0.7	12.4	〃	鎌倉	〃	東播
64	縄文土器	深鉢	3.2	2.8	1.1	8.3	暗茶褐色	縄文	排土	突帯
65	〃	〃	3.0	5.0	0.7	11.6	〃	〃	〃	生駒西麓
66	弥生土器	甕	2.0	4.1	1.1	15.7	〃	弥生後期	〃	叩き目
67	瓦器	羽釜	3.4	2.4	0.4	8.4	暗灰色	鎌倉	溝001	
68	土師器	小皿	1.0	2.9	0.5	3.4	灰茶色	〃	ピット004	
69	〃	椀	2.5	2.2	0.7	3.6	暗灰褐色	平安	土坑010	
70	〃	小皿	3.3	5.3	0.4	8.9	暗灰色	〃	〃	
71	不明	壺？	2.7	2.3	0.5	3.5	灰褐色	〃	〃	
72	土師器	小皿	1.5	2.6	0.4	3.4	暗灰色	〃	ピット013	
73	〃	坏	0.9	3.4	0.3	3.2	灰色	〃	ピット017	
74	須恵器	壺	1.7	6.5	1.0	21.9	暗灰色	〃	土坑025	
75	縄文土器	深鉢	6.0	6.7	0.7	29.0	茶褐色	縄文	河川038	生駒西麓
76	石器	石錐	5.4	2.1	0.9	7.9	灰色	〃	河川040	二上山サヌカイト
77	〃	石鏃	3.8	1.5	0.5	3.0	黒色	弥生	〃	〃
78	〃	楔形	4.3	1.8	0.5	6.4	〃	〃	〃	〃
79	〃	剥片	1.9	1.6	0.2	0.5	〃	〃	〃	〃
80	〃	石庖丁？	2.2	3.4	0.3	2.4	〃	〃	〃	黒色粘板岩
81	〃	剥片	3.4	2.9	0.9	6.7	暗灰色	縄文	溝009	二上山サヌカイト
82	〃	〃	1.1	1.9	0.6	0.6	〃	〃	〃	〃
83	〃	石錐	0.8	1.6	0.2	0.3	紅色	〃	土坑010	紅簾片岩
84	〃	剥片	1.2	1.9	0.2	0.2	黒色	〃	〃	二上山サヌカイト
85	〃	〃	0.9	1.5	0.2	0.2	暗灰色	〃	〃	〃
86	〃	〃	0.5	0.8	0.2	0.1	黒色	〃	〃	〃
87	〃	〃	0.6	0.9	0.1	0.1	〃	〃	〃	〃
88	〃	〃	0.4	0.6	0.1	0.1	〃	〃	〃	〃
89	〃	〃	0.4	0.6	0.1	0.1	〃	〃	〃	〃
90	〃	楔形	3.4	1.5	0.6	2.8	暗灰色	〃	排土中	金山東サヌカイト
91	〃	〃	2.6	1.8	0.5	2.3	黒色	〃	〃	二上山サヌカイト
92	〃	〃	2.2	1.1	0.2	0.7	〃	〃	〃	〃
93	〃	剥片	1.2	1.4	0.2	0.2	〃	〃	〃	〃
94	〃	〃	1.2	1.4	0.2	0.2	〃	〃	〃	〃
95	〃	〃	0.8	1.1	0.2	0.1	〃	〃	〃	〃
96	鉄器	刀	2.7	9.4	0.9	24.0	茶色	中世	5層	
97	石器	砥石	6.4	7.2	2.6	174.0	灰褐色	〃	3・4層	砂岩
98	〃	石皿	15.1	18.4	6.7	2400.0	灰茶色	縄文	排土中	〃

第４章　縄文時代の火葬人骨について

安部考古動物学研究所　安部みき子

はじめに

西福井遺跡は大阪府茨木市西福井に位置し、縄文時代後期の土坑 010 から多数の焼骨が出土した。出土骨はすべて人骨で、燃焼されたことによる骨の変形や亀裂が大きく、多くの骨は小片となっていた。

出土骨片の総数は約 5000 片で、そのうち同定できた骨片は 280 片である。出土部位は全身におよび、同一部位が重複している骨片があることから、複数個体が認められる。また性の判定は基準となる部位が熱による変形や破損しているため、できなかった。

Ⅰ　出土部位

出土骨の同定結果を第３表（22 ～ 24 頁）に示す。なお同一番号で複数の同定部位がある場合は枝番号を付している。

（１）頭骨

歯は歯冠のエナメル質のみが遺存し多くは白色の細片であったが、歯冠の形態を残しているものは 10 片みられた。歯種が同定できる歯冠は白色に変色しているものと変色していないものが混在していた。白色の歯冠は大臼歯片の資料番号 H157- 歯 -22 と H157- 歯 -26 で、それ以外の６片は変色していなかった。変色がみられない歯冠はすべての咬頭に咬耗がなく、萌出直後か未萌出のものである。部位の同定ができた歯は８片あり、切歯３片、犬歯１片と大臼歯４片である。

頭骨はほぼ全ての部位が出土している。頭蓋冠を構成する前頭骨、側頭骨、頭頂骨および後頭骨は小骨片で出土しているものが多く同定は困難であったが、左頭頂骨の鱗部と後頭骨の後頭鱗の内後頭隆起のみ部位の同定ができた。頭蓋底では後頭骨の底部、側頭骨は下顎窩や錐体など 10 片が遺存している。

顔面頭蓋では左右の頬骨の前頭突起および左の上顎骨２片が出土している。上顎骨は歯槽突起の保存が良く、H154- ② -4 と H155- ⑤ -17 はいずれも犬歯の歯槽が閉鎖している。

下顎骨は下顎体の歯槽部が５片と、関節突起２片、筋突起１片と下顎頭の１片が遺存している。歯槽の保存状態が良かったものは H124-1、H155- ① -1、H155- ⑤ -22 である。このうち H124-1 は左小臼歯から右第２小臼歯までの歯槽が遺存しており、左右の切歯４本の歯槽は閉鎖している。また、H155- ① -1 は左中切歯から第１大臼歯の歯槽が観察でき、切歯と第１大臼歯の歯槽は開放しているため生前は歯が釘植していた。しかし、犬歯と第１小臼歯の歯槽は閉鎖しているが歯槽壁の吸収が完全には終わっていないため、歯の喪失から死に至るまでの時間は比較的短いと推察される。H155- ⑤ -22 は右側の中切歯から第１小臼歯歯槽まで遺存しているが歯槽はすべて開放し、生前は歯が全て釘植していたことを示唆している。

（２）椎骨と肋骨

椎骨は多数出土しているが、椎弓根が破損し椎体と椎弓が遊離しているものが多かった。出土骨は環椎（第１頚椎）から尾椎（尾骨）まで多数見られたが、部位の確定は困難であった。頚椎は環椎、軸椎

各１片、それ以外の頚椎の破片は 10 片遺存している。胸椎は 10 片遺存し、腰椎は３片出土している。仙骨は６片遺存しているが重複する部位はなかった。さらに尾椎の椎体が１片出土している。

肋骨は 56 片ありそのうち肋骨頭から約５cm遺存しているもの１片と肋骨体が７cm前後残っているものが３片で、その他の骨は細片であった。

（３）上肢骨

肩甲骨は左３片、右５片同定でき、左は肩峰と外側縁、右は肩甲窩周辺の遺存率が高かった。

鎖骨は左が４片みられ、いずれも骨幹から肩峰端まで遺存し、右は骨幹が１片のみ出土している。

上腕骨は左４片、右９片が同定ができ、遠位部の保存状態は良く、骨頭も２片みられた。骨幹は火葬による変形などで破損が大きいため、同定できる骨片が少なかった。

橈骨は最も保存状態が良く、左が５片と右が４片出土し、いずれも 10 cm近く遺存していた。左は近位部から骨幹にかけ遺存している骨片が５片あった。右は近位から骨幹にかけて遺存しているものが２片、骨幹から遠位部にかけて遺存しているものが２片であった。

尺骨は左右ともに５片同定でき、左の肘頭のみが１片、近位部から骨幹にかけて遺存しているものが左右共に３片あり、骨幹から遠位部は左１片、右２片である。また H154-①-1 の肘頭は非常に小さく、燃焼による骨の収縮率を考慮しても小さいことから本来の骨格が華奢と推察される。

手根骨は同定できる骨片がなかった。中手骨は、左が第５中手骨、右は第１中手骨、第３中手骨２片、第４中手骨ならびに第５中手骨がみられる。そのほかの中手骨は骨幹のみ４片が遺存している。

手の指骨は基節骨３片、中節骨１片、基節骨か中節骨かが判定できないものが３片あった。

（４）下肢骨

寛骨は左側の腸骨翼１片、右側の腸骨の耳状面、腸骨翼、坐骨結節と恥骨結合部の６片と左右不明であるが腸骨稜の一部と腸骨片、寛骨臼の一部が遺存していた。

大腿骨は火葬による破損が大きく、左は近位部と小転子周辺部の２片、右は近位部の１片であり、骨幹は数cmの細片となり同定はできなかった。

脛骨も大腿骨と同様に火葬により損傷が大きく、部位の同定ができたものは右の遠位端のみであった。

腓骨は左の遠位部が２片同定できたのみで、骨幹は数cmの細片であった。

足根骨は左右の距骨、右踵骨、右内側楔状骨、左足の舟状骨と左右の立方骨が出土している。距骨は燃焼による形状のゆがみが小さく保存状態は非常に良かったが、その他の足根骨は損傷が大きかった。中足骨は比較的遺存率が高く、左側では第１中足骨２片、第２中足骨１片、第３中足骨と第５中足骨で、第５中足骨は骨幹中央～遠位端まで遺存していた。右側は骨頭がやや破損している第１中足骨と第４中足骨が遺存している。その他の中足骨は両骨端が破損し骨幹のみ遺存しているため、同定できなかった。

Ⅱ　年齢の推定

年齢の推定ができた部位は、歯と寛骨の耳状面および恥骨結合面であった。歯は未萌出の永久歯の歯冠が出土しているため幼児であるが、焼骨は骨の厚さや大きさからすべて成人と推測される。

歯の年齢推定は未萌出の歯冠の状態（Buikstra & Ubelaker1994）で行った。永久切歯 H157-歯-18～20 の３片の歯冠はほぼ完成しており、切歯が萌出する６才前後である推定される。永久犬歯の萌出時

期は 10 才前後であるが、H157- 歯 -17 は歯冠の下部が破損しているため５～ 10 才と推定される。第１大臼歯の萌出時期は６才前後であり、下顎第１大臼歯の H157- 歯 -23 は歯冠が完成しているが未萌出であることより６才前後である。下顎第２大臼歯の H157- 歯 -24 は歯冠の下部の破損により５～ 10 才と推定される。一方、白色を呈している大臼歯の H157- 歯 -22 と H157- 歯 -26 はいずれもわずかな咬耗がみられた。そのうち H157- 歯 -26 は上顎第３大臼歯であり、第３大臼歯の萌出時期は個人差が大きいため 15 才以上と推定される。

寛骨は腸骨の耳状面と恥骨の恥骨結合面が遺存しており、Buikstra & Ubelaker(1994) により年齢推定を行った。耳状面 H155- ⑥ -16 は Phase １にあたり 20 才前後、右寛骨の H159-1 の恥骨結合面の形状は Phase ６～８にあたり 30 ～ 40 才代と推定できる。

Ⅲ　最小個体数

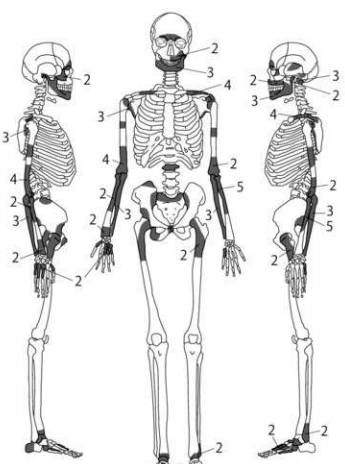
同定ができた骨についてそれぞれの部位の最小個体数を算出した（第４表（24 頁）、第 11 図）。

各骨の部位の最小個体数はほとんどが１から２であり、３以上の部位は左側頭骨の３、下顎骨の３、左右鎖骨の４、右上腕骨の４、左橈骨の５と左右尺骨の３である。一方、歯は切歯と犬歯が幼児のものであり、同一個体の可能性もある。したがって、本遺跡の最小個体数は、左橈骨の５と幼児の歯の１とで６となる。

Ⅳ　古病理学的観察

歯が脱落する原因は抜歯などの人工的なものと齲歯や歯周病によるものとに分けられる。本遺跡の歯は火葬により歯の遺存状態が悪いため齲歯の観察はできなかった。しかし、顎骨の歯槽は出土しているため歯周病の観察は可能である。下顎骨 H155- ① -1 は犬歯と第１小臼歯が生前に脱落し歯槽は閉鎖しているが、歯槽壁の吸収の状態から歯周病による歯の喪失と推定される。また、H124-1 の下顎左小臼歯歯槽の舌側に骨の結節があり病変が疑われる。

脊柱は加齢や労働環境によって椎骨の関節突起や椎体に異常な骨増殖などが起こり、脊椎症を発症する。本遺跡では頚椎、胸椎と腰椎の関節突起や椎体に、関節の変形や骨増殖がみられた。頚椎では中位の H155- ④ -14 と H155- ④ -3 の関節突起や関節面に、また下位の H154- ④ -3 には椎



※数字は点数を示す（2点以上）

第 11 図　出土部位模式図

体辺縁に骨増殖がみられた。胸椎は中位胸椎の H159-2 の２片の椎体および下位の H152-②-11 の椎体の辺縁に、また H153-9 の椎弓にも骨増殖がみられた。腰椎は H66 の関節突起に病変がみられ、H139 は関節突起の病変に加え椎体に骨増殖がみられた。一般に、脊椎症の好発症部位は頚椎と腰椎であるが、本遺跡では中位の胸椎からも脊椎症がみられ、生活環境を知る手がかりとなる。

Ⅴ　抜歯

抜歯と推測される顎骨は左上顎骨の H154-②-4 と H155-⑤-17、下顎骨 H124-1 である。上顎骨はいずれも正中口蓋縫合で遊離しており、切歯歯槽の大部分は破損しているが側切歯の歯槽の一部は残存している。側切歯と第１小臼歯の歯槽は開放しており生前は歯が釘植していたことを示しているが、犬歯の歯槽は閉鎖し歯槽の吸収が完了しているため、犬歯の抜歯と推定される。下顎骨では左右第１小臼歯の歯槽は開放しているが、左右切歯４本の歯槽は壁の吸収も完了しており、抜歯を示唆している。

本遺跡は上顎犬歯と下顎切歯を抜歯しているが、出土した土坑からは複数個体出土していることから、これらの顎骨が同一個体かは検証ができない。一方、下顎骨 H155-⑤-22 のように切歯から第１小臼歯までの歯槽が遺存しているが抜歯されていない個体もあり、今後本遺跡の抜歯習慣の検討が必要である。

Ⅵ　火葬による骨格への影響

焼骨は燃焼時の温度や時間により変色や委縮、変形、亀裂の程度が異なる（池田 1981）。焼成温度による色調の変化は、400 度程度では黒色であるが、500 度になると灰白色、800 度以上に達すると白色になるとされている。また 800 度以上では骨の変形やクラックが大きくなることが知られている。さらに、白骨化した骨と皮膚や筋肉などの軟部組織が残っている骨では、焼かれた時に骨に与える影響が異なり、軟部組織がついた骨の方が変形や亀裂が大きいとされている（岩松他 2008）。

頭骨は灰白色のものが多く、扁平骨は細片となっているが、側頭骨の錐体や下顎骨など頑丈な部位は遺存率が高かった。歯は高温になるとエナメル質は細片となり象牙質から剥がれ落ちるとされているが、本遺跡の歯ではいずれも象牙質は見られず、エナメル質の歯冠のみが出土し、焼かれたものの多くは白色を呈し細片となっている。色調の変化や形態の変形がみられない未萌出の歯は、火葬されなかったか顎骨の歯槽内に埋没しているため焼成温度が低くなったと考えられる。

海面質で構成されている椎骨はひずみも少なく比較的よく遺存していた。肋骨体は白色を呈しひずみと破損が大きく数㎝の骨片となり、多数出土している。上肢骨は灰白色のものが多かったが、上腕骨の一部は灰色のものがあり、燃焼温度にむらがあると思われる。下肢骨は同定できた骨の部位が頭骨や上肢骨と比較して少なく、大腿骨の近位部や脛骨と腓骨の遠位部が遺存している。大腿骨や脛骨の骨幹は緻密質でできており内部は骨髄腔が広がっているため燃焼時にはひずみや亀裂が大きくなり、損傷の割合が高くなることが一因と考えられる。本遺跡の出土骨片は灰白色を呈するものが多く、亀裂や変形が大きいことから、死後からあまり時間をおかずに 500 度以上で火葬されたと推測される。

Ⅶ　縄文時代の火葬

一般に火葬は仏教が伝来して以降に広まったとされ、縄文時代の報告は少ない。しかし、焼骨の出土

例は、縄文時代前期から報告されている（石川 1988）。さらに岡山県倉敷市船倉貝塚の縄文前期の土壙墓からも火葬人骨の部分合葬が報告されている（山田 2013）。

近畿地方では縄文時代後期の滋賀県能登川町林・石田遺跡、奈良県吉野郡宮瀧遺跡（花輪 2003）と京都府長岡京市伊賀寺遺跡（岩松他 2008）の報告がある。本遺跡の近隣に位置する伊賀寺遺跡では、縄文時代後期の土壙墓と２基の火葬墓が発掘され、２基の火葬墓からはいずれも焼骨が出土している。また、そのうちの１基からは 10 体人骨が出土し、子供の焼骨も混入している。これらの人々は死後間もなく火葬されたとの見解である。今回の本遺跡の結果と伊賀寺遺跡の報告とはよく似た傾向を示している。

花輪（2003）は縄文時代は土葬が主流ではあるが火葬もあり、火葬は再葬の一形態であるとしている。本遺跡と伊賀寺遺跡は所在地も近く同時代の火葬墓であり、埋葬様式も似ていることから、今後この地域での縄文時代の火葬という葬制を検討するうえで重要な資料である。

Ⅷ　まとめ

1）火葬人骨は全身の骨格が出土しており、未萌出の歯を除いてすべて焼かれていた。

2）同定できた部位の遺存率は頭骨、椎骨と上肢骨が多く、下肢骨は少なかった。

3）焼骨の性の判定は、ひずみや破損が大きくできなかった。

4）年齢の推定は歯と焼骨で行った。歯は未萌出の歯冠６点が遺存しており、いずれも５～ 10 才の幼児と推定された。また、摩耗がみられる白色化した第３大臼歯の歯冠が遺存しており、15 才以上と推定された。一方年齢推定できる焼骨片が２片あり、寛骨の耳状面は 20 才前後、寛骨の恥骨結合面は 30 ～ 40 才代と推測された。

5）最小個体数は、成人の焼骨が５、未萌出の歯冠を持つ幼児１で、総合で６個体と推測された。

6）頚椎の関節突起や腰椎の椎体には関節面の変形や骨増殖がみられ、脊椎症の発症がみられる。

7）抜歯は上顎骨と下顎骨にみられ、上顎骨はいずれも犬歯、下顎骨は左右切歯４本を抜歯している。

8）焼骨は灰白色のものが多く、焼成温度は 500 度前後で、死後長い時間をおかずに火葬されたと推測される。

参考文献

Buikstra J.E., D.H.Ubelaker　1994　Stannderds. Arkansas Archeological Survey Research Series 44

花輪 宏　2003　縄文時代の「火葬」について．考古学雑誌、87：253-283

池田次郎　1981　出土火葬骨について．「太安萬侶墓」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告、43：79-88

石川日出志　1988　縄文・弥生時代の焼人骨．　駿台史学　74：84-110

岩松保、大藪由美子　2008　長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について．京都府埋蔵文化財報告、107：1-8

山田康弘　2013　縄文時代における部分骨合葬．　国立歴史民族博物館研究報告、178：57-83

第３表　同定結果一覧表（１）

資料番号	枝番号	左右	骨名称	部位名	詳細	備考
H1		右	尺骨	骨幹～遠位部	約8cm遺存	
H2		右	肩甲骨	肩甲棘	約6cm遺存	
H3			不明			
H4		不明	長骨片			
H5		不明	肩甲骨？	肩甲棘？	約2cm遺存	
H6		不明	脛骨？	前縁？	約3cm遺存	
H7			不明			
H8		不明	頭骨片			
H9		不明	長骨片			
H10			不明			
H11		不明	頭骨片			
H12		右	肩甲骨	肩峰の基部		
H13		不明	長骨片			
H14		左	鎖骨	肩峰端	約3cm遺存、肩峰関節面破損。	
H15		不明	長骨片			
H16	1	不明	頭骨片		5	
H16	2		不明		2	
H17	1	右	第3中手骨	骨頭破損		
H17	2		不明		2	
H18			不明		3	
H19		不明	長骨片		2	
H20	1	不明	大腿骨	骨幹	約3cm遺存	
H20	2	不明	長骨片		3	
H21		右	踵骨	載距突起周辺	載距突起～内側部遺存	
H22		右	肋骨片	肋骨体	約8cm遺存	
H23		右	寛骨	腸骨翼	耳状面上方約5cm遺存	
H24		不明	長骨片			
H25			不明			
H26		不明	長骨片			
H27		左	腓骨	遠位部	約4cm遺存、遠位端破損	
H28		不明	肋骨片			
H29		—	腰椎？	椎弓		
H30		左	側頭骨	下顎窩周辺		
H31		不明	肋骨片			
H32			不明		2	
H33		不明	頭骨片			
H34		右	第3中足骨	骨幹～遠位端	骨頭破損	
H35		不明	長骨片			
H36		不明	長骨片			
H37		不明	長骨片			
H38			不明			
H39		不明	肋骨片			
H40		不明	長骨片			
H41			不明		5	
H42			不明		2	
H43			不明		2	
H44		—	頭骨片			
H45		右	尺骨	肘頭～骨幹	約12cm遺存	
H46		左	頭頂骨	鱗状縫合の一部	幅4cm×高5cmの台形状に遺存	
H47		—	頭骨片			
H48		不明	長骨片			
H49		左	肩甲骨	外側縁中央より下角	約6cm遺存、下角破損	
H50		不明	長骨片		3	
H51		—	頭骨片			
H52		—	頭骨片			
H53		—	頭骨片			
H54		不明	長骨片			
H55	1	右	第1中足骨		骨頭やや破損	底部にリップあり
H55	2		不明		3	
H56		不明	長骨片		2	
H57		左	鎖骨	肩峰端	約4cm遺存	
H58			不明			
H59		不明	長骨片			
H60		不明	長骨片			
H61		不明	長骨片			
H62		不明	長骨片			
H63		不明	頭骨片			
H64			不明			
H65		右	側頭骨	下顎窩周辺		
H66		—	腰椎	右半分遺存		関節突起に病変あり
H67			不明			
H68			不明		3	
H69		不明	長骨片			
H70			不明			
H71		不明	長骨片			
H72			不明		3	
H73		不明	頭骨片			
H74		左	大腿骨	小転子周辺		
H75		不明	長骨片			
H76		不明	頭骨片			
H77		不明	頭骨片			
H78		左	橈骨	骨幹	約10cm遺存	
H79		不明	腓骨	骨幹	約8cm遺存	
H81		不明	大腿骨	骨幹	約4cm遺存	

資料番号	枝番号	左右	骨名称	部位名	詳細	備考
H83		不明	頭骨片			
H84		不明	頭骨片			
H85		右	上腕骨	骨頭		
H86		不明	長骨片			
H87		不明	長骨片			
H89		不明	長骨片			
H90			不明			
H91		不明	頭骨片			
H92		不明	頭骨片		10	
H93		—	椎骨	椎体		
H94			不明		4	
H95		—	下顎骨	左関節突起		
H96		不明	長骨片			
H97		不明	肋骨片		2	
H100		不明	長骨片		9	
H101		不明	肋骨片			
H102		右	尺骨	滑車切痕下部～鈎状突起下方		
H103		不明	長骨片	骨幹	約4cm遺存	
H104		不明	長骨片	骨幹	約3cm遺存	
H105		不明	大腿骨	骨幹	約10cm遺存	
H106		右	肋骨	肋骨体	約6cm遺存	
H107		右	肋骨	肋骨体	肋骨結節～約7cm遺存	
H108		不明	長骨片	骨端部	約3cm遺存	
H109		不明	長骨片	上腕骨外側縁？	約4cm遺存	
H110		不明	長骨片	骨幹	約4cm遺存	
H111		左	上腕骨	骨頭		
H116			不明		10	
H118	1	右	肩甲骨	関節窩～肩甲棘の基部周辺		
H118	2		不明		3	
H119		不明	長骨片	骨幹	約6cm遺存	
H120		不明	長骨片	骨幹	約7cm遺存	
H121		左	尺骨	骨幹～遠位端	約6cm遺存	
H122		不明	中手骨		中手骨底の一部破損	第2～5中手骨のうちの1つ
H123	1	不明	長骨片	骨幹	約6cm遺存	
H123	2	右	第4中手骨			
H124	1	—	下顎骨	下顎体	左小臼歯歯槽～右第2小臼歯歯槽間遺存。左右の切歯歯槽は閉鎖	左小臼歯の歯槽は病変？切歯は抜歯
H124	2	不明	長骨片			
H124	3		不明			
H125		—	椎骨	椎弓		
H126		右	尺骨	骨幹～遠位端	約8cm遺存	
H127		不明	長骨片	骨幹	約4cm遺存	
H128		左	上腕骨	骨幹	約12cm遺存	
H129		不明	長骨片	骨幹	約5cm遺存	
H130		右	肋骨（中位）	肋骨頸周辺	約5cm遺存、肋骨頭の先端破損	
H131	1	—	前頭骨	左眼窩の一部		
H131	2	不明	長骨片			
H131	3		不明			
H132		左	尺骨	滑車下部～骨幹	約5cm遺存	
H133		不明	頭骨片			
H134		不明	脛骨	骨幹	約8cm遺存	
H135		右	上腕骨	骨幹～遠位端	約11cm遺存	
H136		右	上腕骨	骨幹	三角筋粗面周辺、約9cm遺存	細い
H137		左	寛骨	腸骨翼	耳状面～大坐骨切痕周辺	
H138		左	第2中足骨			
H139		—	腰椎（上位）			椎体にリップあり、右下関節突起に病変あり
H140	1	不明	大腿骨	骨幹	約9cm遺存	細い
H140	2	左	肩甲骨	肩峰		
H141	1	左	上腕骨	遠位端		
H141	2	右	第3中手骨			
H141	3	不明	肋骨片			
H141	4	不明	長骨片		7	
H141	5		不明			
H142		右	鎖骨	骨幹	両骨端破損	細い（女性？）
H143		不明	腓骨	骨幹	約4.5cm遺存	
H144		左	橈骨	橈骨粗面～骨幹	約7cm遺存	
H145	1	不明	長骨片		2	
H145	2		不明			
H146	1	右	寛骨	腸骨体と翼の前部		
H146	2	右	橈骨	橈骨頭～骨幹	約7cm遺存	
H146	3	不明	頭骨片			
H146	4		不明		4	
H147	1	不明	頭骨片		10	
H147	2	不明	長骨片		4	
H147	3		不明			
H148	1	不明	頭骨片		10	
H148	2	—	椎骨片		5	
H148	3	不明	長骨片		22	
H148	4		不明			
H149	1	—	下顎骨片			
H149	2	不明	頭骨片		6	
H149	3	不明	長骨片		13	

第３表　同定結果一覧表（２）

資料番号	枝番号	左右	骨名称	部位名	詳細	備考
H149	4	不明	肋骨片		3	
H149	5	ー	頸椎	椎弓片		
H149	6	ー	椎骨	椎体		
H149	7		不明			
H150	1	不明	腓骨	骨幹	約2.5cm遺存	
H150	2	不明	頭骨片		6	
H150	3	ー	椎骨片		6	
H150	4	不明	長骨片		6	
H150	5	不明	肋骨？		3	
H150	6		不明			
H151	1	不明	手の基節骨			第2～5基節骨のうちの1つ
H151	2	不明	足の基節骨			第2～5基節骨のうちの1つ
H151	3	ー	椎骨片		6	
H151	4	不明	頭骨片		3	
H151	5	不明	長骨片		6	
H151	6		不明			
H152-①	1	不明	頭骨片		6	
H152-①	2	不明	長骨片		9	
H152-①	3		不明			
H152-②	1	ー	下顎骨	右下顎頭	約3cm遺存	
H152-②	2	左	第5中手骨	骨幹中央～遠位端		
H152-②	3	不明	手の基節骨			
H152-②	4	不明	第1中足骨	骨頭		
H152-②	5	左	第3中足骨	骨幹中央～遠位端		
H152-②	6	左	橈骨	橈骨頭～骨幹	約5cm遺存、頭の一部破損	
H152-②	7	右？	橈骨	橈骨頭の半分		
H152-②	8	左？	橈骨	橈骨頭の半分		
H152-②	9	右	寛骨	寛骨臼月状面の坐骨部～坐骨結節上部	約5cm遺存	
H152-②	10	左	側頭骨	錐体の内耳孔周辺		
H152-②	11	ー	胸椎（下位）	椎体	2	いずれもリップあり
H152-②	12	ー	頸椎（下位）or 胸椎（上位）	椎体		
H152-②	13	ー	仙骨	第5仙椎の椎体		
H152-②	14	ー	椎骨片		3	
H152-②	15	ー	頭骨片		17	
H152-②	16	不明	長骨片		17	
H152-②	17	不明	手の中節骨		近位端破損	
H152-②	18		不明			
H152-②	19	不明	肋骨片		9	
H153	1	不明	腓骨	骨幹	約6cm遺存	
H153	2	右	第1中手骨			
H153	3	右	頬骨	前頭突起	約4cm遺存	
H153	4	左	腓骨	骨体中央～遠位部	約4cm遺存 遠位端破損	
H153	5	左	肩甲骨？	関節窩周辺		
H153	6	不明	手の指骨		2	
H153	7	不明	肋骨片			
H153	8	ー	椎骨	椎体	3	
H153	9	ー	胸椎	椎弓	2	
H153	10	ー	椎骨片		4	
H153	11	ー	頭骨片		25	
H153	12	不明	長骨片		14	
H153	13		不明			
H154-①	1	左	尺骨	肘頭		小さい
H154-①	2	右	上腕骨	遠位部	約8cm遺存、関節面破損	
H154-①	3	不明	大腿骨	骨頭の骨頭窩周辺		
H154-①	4	不明	大腿骨	骨幹	約8cm遺存	
H154-①	5	右	第4中足骨			
H154-①	6	不明	中手骨 or 中足骨			
H154-①	7	不明	寛骨	腸骨片	12	
H154-①	8	不明	肋骨片		4	
H154-①	9	ー	胸椎（上位）			
H154-①	10	ー	椎骨	椎体片	3	
H154-①	11	左	側頭骨	下顎窩		
H154-①	12	ー	頭骨片		6	
H154-①	13		不明			
H154-②	1	左	上腕骨	遠位部	約6cm遺存、内・外側上顆より下方破損	
H154-②	2	右	脛骨	遠位端	下関節面～内果関節面遺存	
H154-②	3	右	寛骨	耳状面上部		
H154-②	4	左	上顎骨	中切歯～第2大臼歯歯槽	犬歯歯槽は閉鎖	抜歯
H154-②	5	ー	下顎骨	下顎体～筋突起の前方まで	左側約4cm遺存、第1？大臼歯歯槽～筋突起の前方まで、第2、3大臼歯歯槽閉鎖	
H154-②	6	ー	頭骨片		8	
H154-②	7	ー	仙骨	仙骨体	左右の後仙骨孔間	
H154-②	8	ー	椎骨	椎弓		
H154-②	9	不明	長骨片		15	
H154-②	10		不明			
H154-③	1	右	尺骨	近位面～骨幹	約6cm遺存、肘頭破損	
H154-③	2	右	肩甲骨	関節窩周辺		
H154-③	3	左	橈骨	橈骨頭～骨幹	約9cm遺存、頭の一部破損	
H154-③	4	ー	椎骨	椎体	2、下位胸椎 or 上位腰椎の椎体と椎体片	
H154-③	5	ー	胸椎	椎弓		
H154-③	6	ー	椎骨	椎弓		
H154-③	7	不明	手の指骨	基節骨 or 中節骨		
H154-③	8	ー	頭骨片		4	
H154-③	9	不明	長骨片		12	
H154-③	10		不明			
H154-④	1	左	頬骨	前頭突起		
H154-④	2	ー	第1or2胸椎			
H154-④	3	ー	頸椎（下位）			椎体周辺にリップあり
H154-④	4	左	第5中足骨	骨幹中央～遠位端		
H154-④	5	右	踵骨	後距骨関節面の一部		
H154-④	6	不明	寛骨	腸骨体	約3cm遺存	
H154-④	7	不明	長骨片		26	
H154-④	8	ー	頭骨片		5	
H154-④	9	不明	肋骨片		8	
H154-④	10		不明			
H155-①	1	ー	下顎骨	下顎体	左中切歯～第1大臼歯の歯槽遺存、犬歯と第1小臼歯は脱落して歯槽閉鎖	抜歯ではない
H155-①	2	ー	頭骨片		9	
H155-①	3	不明	大腿骨片		2	
H155-①	4	右	上腕骨	上腕骨滑車の一部		
H155-①	5	不明	肩甲骨	肩甲棘周辺		
H155-①	6	不明	大腿骨	顆間窩の一部		
H155-①	7	不明	肋骨片		4	
H155-①	8		不明		4	
H155-①	9	不明	小骨片			
H155-①	10	不明	長骨片		15	
H155-②	1	不明	肋骨片		6	
H155-②	2	ー	下顎骨	下顎体下縁	正中～両側約2cm遺存	
H155-②	3	左	側頭骨	錐体		
H155-②	4	右	頬骨			
H155-②	5	不明	頭骨片		13	
H155-②	6	右	上腕骨	肘頭窩周辺		
H155-②	7	ー	環椎	前弓～右外側塊まで		
H155-②	8	不明	不明			
H155-②	9	ー	頸椎（中位～下位）			
H155-②	10	ー	椎骨（下位）	椎体		
H155-②	11	ー	尾椎	椎体		
H155-②	12	左	第1中足骨	骨頭		
H155-②	13	左	立方骨			
H155-②	14	右	立方骨			
H155-②	15	不明	長骨片		17	
H155-②	16		不明			
H155-③	1	左	側頭骨	下顎窩周辺		
H155-③	2	不明	頭骨片		14	
H155-③	3	ー	頸椎（中位）	椎体と椎弓の左半分		
H155-③	4	ー	胸椎（下位）	椎弓		
H155-③	5	ー	椎骨	椎体の一部	3	
H155-③	6	ー	胸椎？	椎弓の右半分		
H155-③	7	不明	長骨片		23	
H155-③	8		不明			
H155-④	1	右	内側楔状骨			
H155-④	2	右	上腕骨	遠位部	約4cm遺存、遠位端破損	
H155-④	3	ー	頸椎（中位）			関節突起の関節面に異常骨増殖、頸椎症？
H155-④	4	ー	頸椎（中位）			
H155-④	5	右	側頭骨	錐体～乳様突起まで		
H155-④	6	ー	下顎骨	下顎体	左大臼歯歯槽部約4cm遺存	
H155-④	7	右	側頭骨	錐体		
H155-④	8	右	肩甲骨	外側縁	約7cm遺存	
H155-④	9	ー	頭骨片		13	
H155-④	10	ー	前頭骨	右の眼窩上縁	約3cm遺存	
H155-④	11	不明	指骨			
H155-④	12	不明	肋骨片		2	
H155-④	13	ー	腰椎（上位）	椎弓のみ遺存		
H155-④	14	ー	頸椎（中位）	椎体と左右の関節突起遺存		骨増殖あり
H155-④	15	ー	第2頸椎（軸椎）	歯突起と椎体のみ遺存		
H155-④	16	ー	椎骨片		2	
H155-④	17	不明	長骨片		16	
H155-④	18		不明			
H155-⑤	1	右	上腕骨	骨幹	遠位部約10cm遺存	
H155-⑤	2	右	橈骨	橈骨頭～骨幹	約10cm遺存	
H155-⑤	3	左	橈骨	近位端～骨幹	約10cm遺存	
H155-⑤	4	左	尺骨	鉤状突起～骨幹	約10cm遺存	
H155-⑤	5	左	腓骨	遠位端	約4cm遺存	
H155-⑤	6	左	大腿骨	近位部	約8cm遺存、骨頭の一部破損	
H155-⑤	7	右	大腿骨	近位部	約8cm遺存、骨頭の一部破損	
H155-⑤	8	ー	胸椎（上位）	椎弓		
H155-⑤	9	ー	椎骨	椎弓の右側	下位胸椎 or 上位腰椎	

第３表　同定結果一覧表（３）

資料番号	枝番号	左右	骨名称	部位名	詳細	備考
H155-⑤	10	不明	中手骨 or 中足骨			
H155-⑤	11	不明	第５中手骨？	骨幹		
H155-⑤	12	―	椎骨	椎弓の一部		
H155-⑤	13	不明	中手骨 or 中足骨	骨幹		
H155-⑤	14	―	仙骨	横線周辺		
H155-⑤	15	不明	長骨片		11	
H155-⑤	16	不明	長骨	上腕骨頭？		
H155-⑤	17	左	上顎骨	側切歯〜第１大臼歯歯槽	犬歯の歯槽閉鎖	抜歯
H155-⑤	18	―	頭骨片		7	
H155-⑤	19	―	後頭骨	左右の後頭顆〜底部		
H155-⑤	20	―	下顎骨	右筋突起		
H155-⑤	21	―	下顎骨	左関節突起		
H155-⑤	22	―	下顎骨	下顎体	右側のみ遺存、中切歯〜第１小臼歯の歯槽	抜歯なし
H155-⑤	23	左	側頭骨	乳様突起		
H155-⑤	24	不明	肋骨			
H155-⑤	25		不明		10	
H155-⑥	1	右	距骨			
H155-⑥	2	左	距骨		距骨体の下部破損	
H155-⑥	3	左	尺骨	近位部	約４cm遺存	
H155-⑥	4	右	橈骨	骨幹中央〜遠位端	約 10cm 遺存	
H155-⑥	5	右	橈骨	骨幹中央〜遠位部	約 10cm 遺存、遠位端破損	
H155-⑥	6	左	第１中足骨		骨頭破損	
H155-⑥	7	左	鎖骨	骨体中央〜肩峰部	約６cm遺存、肩峰端破損	
H155-⑥	8	―	仙骨	仙骨底		
H155-⑥	9	不明	大腿骨片		4	
H155-⑥	10	不明	腓骨	骨幹	約２cm遺存が２	
H155-⑥	11	―	椎骨	椎体		
H155-⑥	12	―	前頭骨	前頭洞周辺		
H155-⑥	13	―	後頭骨	内後頭隆起周辺		
H155-⑥	14	―	頭骨片		5	
H155-⑥	15	不明	寛骨	寛骨臼の一部		
H155-⑥	16	右	寛骨	耳状面周辺		Bedford et al. の Phase 1、若い(20 才前後)
H155-⑥	17	不明	長骨片		11	
H155-⑥	18		不明			
H156	1	不明	中手骨	骨幹	約４cm遺存,骨頭破損,底部の破損大	
H156	2	―	頸椎（下位）	椎体		
H156	3	不明	肋骨片			
H156	4	―	頭骨片		3	
H156	5	不明	長骨片		16	
H156	6		不明			
H157	1	―	仙骨	左上関節突起		
H157	2	左	側頭骨	錐体の一部		
H157	3	―	頭骨片		4	
H157	4	不明	長骨片		8	
H157	5		不明			
H157-歯	17	不明	上顎犬歯	歯冠（エナメル質のみ）		咬耗なし、未萌出
H157-歯	18	左	下顎切歯	歯冠（エナメル質のみ）	前面のみ遺存	咬耗なし、未萌出
H157-歯	19	左	上顎切歯	歯冠（エナメル質のみ）	前面のみ遺存	咬耗なし、未萌出
H157-歯	20	右	上顎切歯	歯冠（エナメル質のみ）		咬耗なし、未萌出
H157-歯	21	不明	大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）	一部のみ遺存	咬耗なし
H157-歯	22	不明	大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）	一部のみ遺存	咬耗わずかにあり、焼骨（白色）
H157-歯	23	右	下顎第１大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）	頬側一部破損	咬耗なし、未萌出
H157-歯	24	右	下顎第２大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）		咬耗なし、未萌出
H157-歯	25	右	上顎第 1or2 大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）	遠心舌側咬頭破損	咬耗なし、未萌出
H157-歯	26	左	上顎第３大臼歯	歯冠（エナメル質のみ）	一部のみ遺存	咬耗あり、焼骨（白色）
H158	1	左	足の舟状骨			
H158	2	右	上腕骨	上腕骨小頭		
H158	3	不明	肋骨片			
H158	4	―	椎骨片		8	
H158	5	―	頭骨片		10	
H158	6	不明	長骨片		12	
H158	7		不明			
H158-歯			歯	エナメル質の細片	116	
H159	1	右	寛骨	恥骨結合部		Todd の Phase 6〜8、30〜40 才代
H159	2	―	胸椎（中位）	椎体		リップあり
H159	3	―	椎骨	椎弓	3	
H159	4	―	頸椎	椎体	3	
H159	5	―	頭骨片		14	
H159	6	右	第５中手骨	骨幹中央〜遠位端	約１cm遺存	
H159	7	不明	中手骨	骨頭の一部		
H159	8	不明	手の指骨	骨頭〜骨幹		
H159	9	不明	手の基節骨	骨幹中央〜基節骨底		
H159	10	不明	長骨片		21	
H159	11		不明			
H159	12	不明	肋骨片		2	
H159			不明			
H159-歯			歯	エナメル質の細片	219	

第４表　各骨部位の最小個体数

出土部位 骨の名称	左右	最小個体数
上顎犬歯	不明	1
上顎切歯	右	1
上顎第３大臼歯	左	1
下顎切歯	左	1
下顎第１大臼歯	右	1
下顎第２大臼歯	右	1
前頭骨	―	1
側頭骨	左	3
側頭骨	右	2
頭頂骨	左	1
後頭骨	―	1
上顎骨	左	2
頬骨	左	1
頬骨	右	2
下顎骨	―	3
第１頸椎（環椎）	―	1
第２頸椎（軸椎）	―	1
肩甲骨	左	1
肩甲骨	右	3
鎖骨	左	4
鎖骨	右	1
上腕骨	左	2
上腕骨	右	4
橈骨	左	5*
橈骨	右	2
尺骨	左	3
尺骨	右	3
第５中手骨	左	1
第１中手骨	右	1
第３中手骨	右	2
第４中手骨	右	1
第５中手骨	右	1
寛骨	左	1
寛骨	右	2
大腿骨	左	2
大腿骨	右	1
脛骨	右	1
腓骨	左	2
距骨	左	1
距骨	右	1
踵骨	右	1
内側楔状骨	右	1
足の舟状骨	左	1
立方骨	左	1
立方骨	右	1
第１中足骨	左	2
第１中足骨	右	1
第２中足骨	左	1
第３中足骨	左	1
第３中足骨	右	1
第４中足骨	右	1
第５中足骨	左	1

* 出骨全体の最小個体数

第５章　放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

西福井遺跡のＡ区土坑 010 から検出された炭化材と骨の放射性炭素年代測定結果について報告する。

Ⅰ　試料

分析試料は３点である。試料１は炭化材 0.1g で、樹皮のため種類不明である。試料２は 3.11g の焼骨で部位は頭蓋骨、種類は不明である。試料３は、1.78g の焼骨で部位、種類ともに不明である。

Ⅱ　分析方法

試料は、元の試料の状況を観察し、写真撮影したあと、汚れた部分を削り落として分析用試料とする。

炭化材は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

肉眼観察の結果、骨２点は焼骨と判断される。骨を用いた年代測定を行う場合，土壌中で交換または分解されやすい無機質（大部分がヒドロキシアパタイト）より、化学的風化作用に比較的強い有機質の硬タンパク質コラーゲンを用いるほうが，信頼度の高い値となる場合が多い（南 2013）。しかし、基本的に焼骨では燃焼によってコラーゲンが失われている。骨のコラーゲンの保存状態を調べるためには C/N 比が有効であり、値が 2.9 ～ 3.5 であれば保存状態が良好とされる（van Klinken1999）。しかしながら、今回の値は、試料２が 279、試料３が 244 であり、窒素が極端に少なく、コラーゲンが残っていない。骨の無機成分はほとんどがリン酸カルシウムだが，僅かに炭酸ヒドロキシアパタイトとして炭素を含んでいる。そこで、この炭素を使って年代測定を行う。塩酸で表面を溶かしたあと、純水で試料を洗浄して乾燥させ、粉砕する。これを熱分解させることによって、二酸化炭素を得る（Edg 処理）。

試料の燃焼・熱分解、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1 等）の測定も行う。

δ 13C は試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の

表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach, 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.32（Bronk, 2009）を用いる。較正曲線はIntcal13（Reimer et al., 2013）を用いる。

Ⅲ　結果

結果を第５表、第12図に示す。同位体補正を行った年代値は、試料１が1,145 ± 20 BP、試料２が3,160 ± 30 BP、試料３が3,530 ± 50 BPである。なお、試料１の炭化材は保存状態がよく、定法の前処理（1mol/L によるAAA処理）ができた。また、年代測定行うのに十分な炭素（約1mg）を回収できた。一方、焼骨の２点は、十分な炭素量が回収できず（約0.1mg程度）、測定誤差が大きくなっている。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730 ± 40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の14C年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13（Reimer et al. 2013）である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver & Polach1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う比較、再計算がしやすいように、表には丸めない値（１年単位）を記す。２σの値は、試料１がcal AD 777 ～ 973、試料２がcal BC 1,501 ～ 1323、試料３がcal BC 2,012 ～ 1,700である。

今回の結果をみると、同一遺構ではあるが、炭化材と骨とでは値が大きく異なる。今回測定した骨の炭素は、炭酸ヒドロキシアパタイト由来である。生骨あるいは低温で焼かれた骨は結晶度が低く、土壌中で炭素が交換または分解され、本来の年代値を示さない場合が多い。しかし、600℃を超える温度で

第５表　放射性炭素年代測定結果

試料名	種別	分析方法	補正年代 BP（暦年較正用）	δ 13 C (‰)	暦年較正年代		年代値		確率	Code No.
試料１ A IC 010	炭化材 樹皮	AAA	1145 ± 20 (1144 ± 20)	-32.53 ± 0.42	σ	cal AD 881 – cal AD 903	cal BP 1069 – 1047	0.231	pal-10702
						cal AD 918 – cal AD 965	cal BP 1032 – 985	0.451	
					2σ	cal AD 777 – cal AD 791	cal BP 1173 – 1159	0.045	
						cal AD 806 – cal AD 843	cal BP 1144 – 1107	0.065	
						cal AD 861 – cal AD 973	cal BP 1089 – 977	0.844	
試料２ A IC 010	焼骨 焼骨骨	Edg	3160 ± 30 (3158 ± 29)	-18.88 ± 0.70	σ	cal BC 1493 – cal BC 1481	cal BP 3442 – 3430	0.103	pal-10703
						cal BC 1454 – cal BC 1410	cal BP 3403 – 3359	0.579	
					2σ	cal BC 1501 – cal BC 1391	cal BP 3450 – 3340	0.926	
						cal BC 1336 – cal BC 1323	cal BP 3285 – 3272	0.028	
試料３ A IC 010	焼骨 部位不明	Edg	3530 ± 50 (3528 ± 49)	-13.90 ± 1.53	σ	cal BC 1927 – cal BC 1862	cal BP 3876 – 3811	0.301	pal-10704
						cal BC 1851 – cal BC 1772	cal BP 3800 – 3721	0.381	
					2σ	cal BC 2012 – cal BC 1999	cal BP 3961 – 3948	0.014	
						cal BC 1978 – cal BC 1741	cal BP 3927 – 3690	0.926	
						cal BC 1711 – cal BC 1700	cal BP 3660 – 3649	0.012	

1）計算には、Oxcal4.23を使用。

2）BP：年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

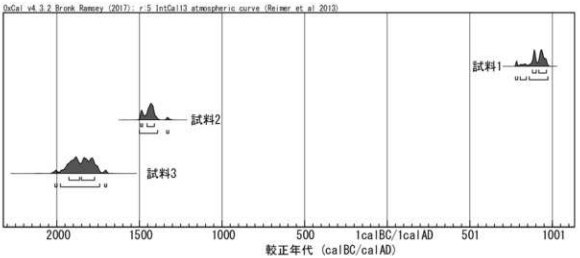
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4）AAAは、酸、アルカリ、酸処理。Aaaは、定法よりアルカリの濃度を薄くした処理。Edgは試料表面を酸やアルカリで溶かす処理。

5）暦年較正には表に示した丸める前の値を使用。

6）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

7）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である



第 12 図　暦年較正結果

燃焼を受けた場合には、炭酸ヒドロキシアパタイトの結晶性が高まって、外来炭素の影響を受けにくくなり、骨本来の年代値を示すことがある。さらに、燃焼によって当時の燃料材（木炭）の炭素を取り込みが行われ、δ 13C の値が下がる場合もある。このような理由により焼骨であっても信頼できる年代が得られる可能性があることが指摘されている（Lanting et al.2001）。なお、今回の焼骨のδ 13C は骨の値に近く、燃料材の混入の可能性は低い。

発掘調査結果によると、今回の焼骨の年代試料は、縄文時代に帰属するとみなされる。このことから、今回の焼骨試料については、高温で焼かれることによって炭酸ヒドロキシアパタイトの結晶性が高まり、土壌中での炭素の交換が起きにくかった結果、炭素量は少なかったものの、想定した年代値に近い値が得られた可能性が想定される。ただし、現状では、焼骨試料が高温焼成を受けていたかの根拠に乏しい状況にあると思われる。このため、今回の年代値ついては、焼骨の燃焼温度やその程度に関する肉眼等による記載や化学分析などの検討をさらに行いながら慎重に評価していく必用がある。

参考文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon ,51, 337-360.

Lanting JN., Aerts-Bijma AT., van der Plicht J., 2001, Dating of cremated bone. Radiocarbon, 43, 249-254.

南　雅代，2013，骨試料の年代測定．フィッション・トラック　ニュースレター，26，76-79.

Reimer PJ., et al ,2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Stuiver M., & Polach AH.,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

van Klinken GJ., 1999, Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science, 26, 687-695

第6章　総　括

今回の発掘調査は、小規模なものであったが、昨年度同様、種々の新知見を得ることができた。以下、時代順にまとめる。

縄文時代　調査区北側のA区では、現代の表土下30㎝で、調査区南側のB区では表土下50㎝で、縄文時代の遺構面に達する。縄文時代の検出された遺構は、南北30ｍの調査範囲の各所で発見された土坑群である。各土坑の形は、土坑010は長方形、土坑020・土坑034・土坑043は楕円形、土坑031は不整形と異なるが、埋土はいずれも黒色土で、遺物を含まない点が共通している。

ただし、唯一、土坑010からは縄文土器片が土坑中から出土し、縄文時代後期以降のものと判明した。その土坑010からは縄文時代早期末～前期初頭の土器も出土しているので、近くにその時期の集落跡やキャンプ地の存在が推定された。

また、4層からは縄文時代中期、河川040からは縄文時代晩期の土器も出土しているので、縄文時代の生活の歴史が一時的でなかったことがうかがい知れた。

土坑010の人骨については、大阪府内では数少ない縄文時代の焼かれた人骨群であった。年齢がさまざまあり、また複数個体が認めれた人骨は、形質人類学にとっても貴重な資料である。病変や風習的な抜歯など、今まで分らなかった部分が明らかとなった意義はとても大きい。

土坑内から出土した縁帯文土器の細片により、土坑の時期は後期を想定したが、人骨片の放射性炭素年代も、年代差があるものの概ねこの時期を示しており、考古学的にとらえた時代観と調和的と考えられる。なお土坑内炭化物の放射性炭素年代は平安時代頃を示したが、これは土坑010を切っている当該期のピット埋土によるものが試料のサンプリング時に混入したものと考えられる。

弥生時代～古墳時代　河川040から籾圧痕のついた縄文時代晩期の土器や弥生時代前期、中期、後期の土器、弥生時代のサヌカイト製石鏃や剥片、石庖丁なども出土したことによって、近くに稲作を生業とした農村の存在が推定された。河川040からは、古墳時代前期の土師器も出土した。庄内式や布留式の出土は本遺跡では珍しく、本調査地の隣接丘陵上にある前方後円墳である紫金山古墳や将軍山古墳などの前期古墳との関係がうかがえた。

平安時代～鎌倉時代　2面の遺構面が検出された。共に水平堆積し、床土を伴うことによって中世以降の水田と考えられた。調査区北側では、小規模な掘立柱建物やピット群が検出された。建物跡の方向は正方位に合致することから、周辺に存在する中世以降の条里遺構に規制されたものと推定された。

図　　版

土坑 010 全景（南西から）

a. 土坑 010 全景（北西から）

b.　土坑 010　人骨検出状況（東から）

土坑 010 出土主要人骨（同一個体とは限らない）

図版一　西福井遺跡　遺構（一）

a. 土坑 010（左）とピット列検出状況（北から）

b. 土坑 010（手前）とピット列掘削状況（北から）

図版二　西福井遺跡　遺構（二）

a. 第 1 遺構面（手前：溝 007、奥：溝 008）

b. 第 1 遺構面　下層全景（南から）

図版三　西福井遺跡　遺構（三）

a. 第２遺構面　遺構検出状況（南から）

b. 第２遺構面　遺構掘削状況（南から）

図版四　西福井遺跡　遺構（四）

a. 第２遺構面　遺構掘削状況（北から）

b. 第２遺構面全景（南から）

a. 河川 040 断面（南東から）

b. 土坑 010　検出状況（北から）

図版六

西福井遺跡　遺構（六）

a. 土坑 010　掘削状況・1（北西から）

b. 土坑 010　掘削状況・2（南から）

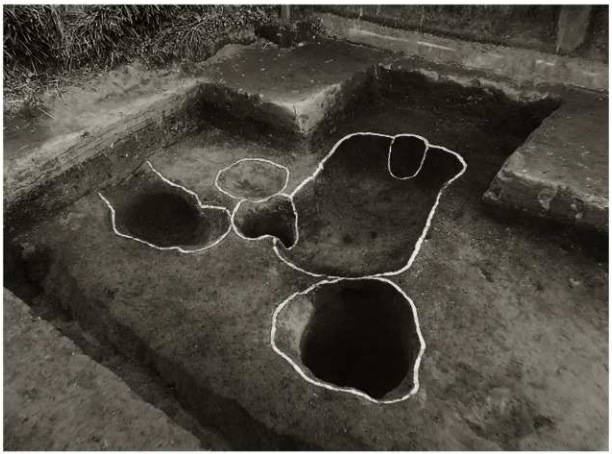
図版七

西福井遺跡　遺構（七）

a. 土坑 010　掘削状況・3　（南から）

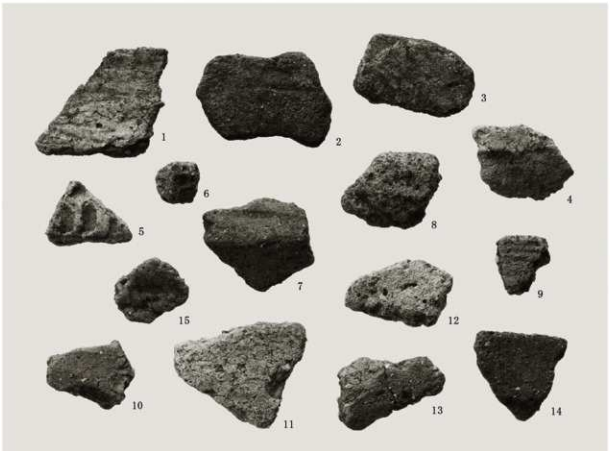
b. 土坑 010　人骨検出状況（部分、東から）

図版八　西福井遺跡　遺構（八）

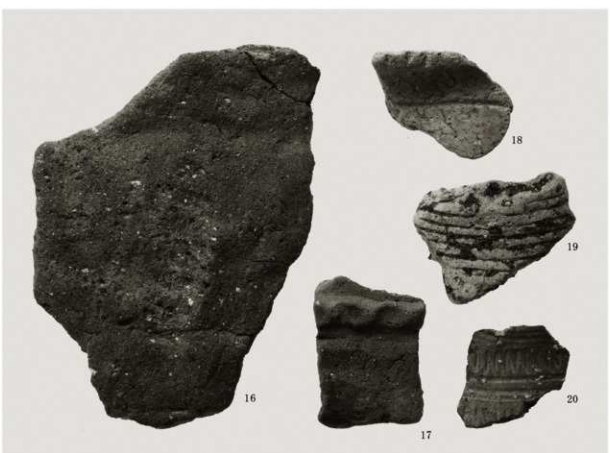


a. 土坑 010　完掘状況（南西から）

b. 調査区南端全景（北から）



a. 土坑010　縄文土器(1～15)



b. 河川040　縄文土器(16･17)、弥生土器(18～20)

a. 条痕文拡大（図版９　a1）

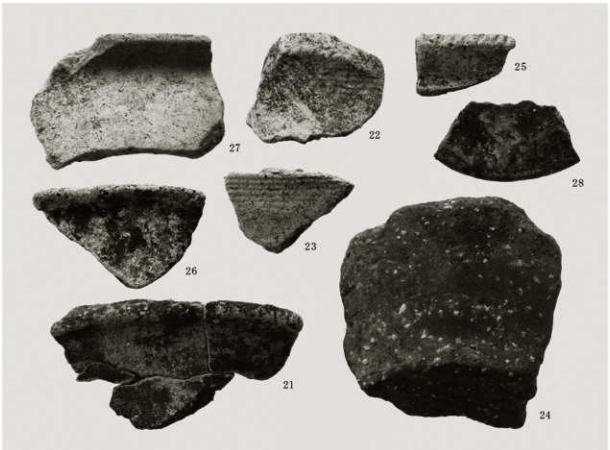
b. 押引文拡大（図版９　a2）

c. 爪形文拡大（図版９　a5）

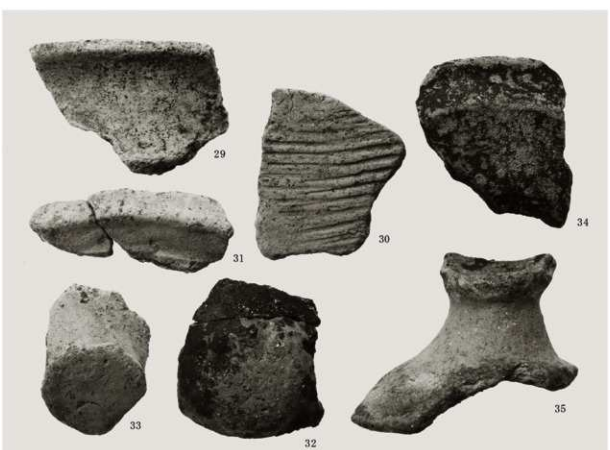
d. 沈線文拡大（図版９　a7）

e. 籾痕拡大（図版９　b16）

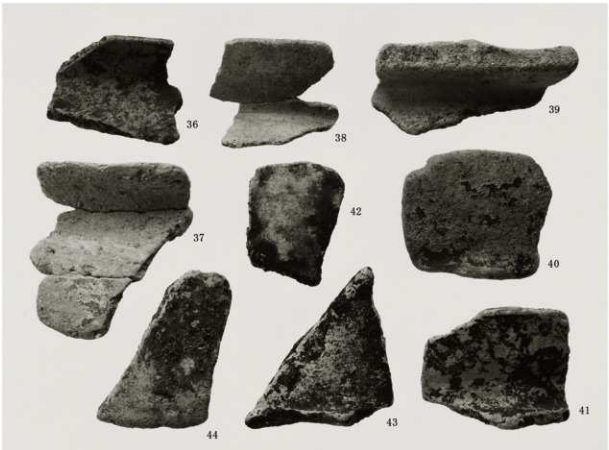
f. ヘラ描き直線文・波状文拡大（図版９　b20）



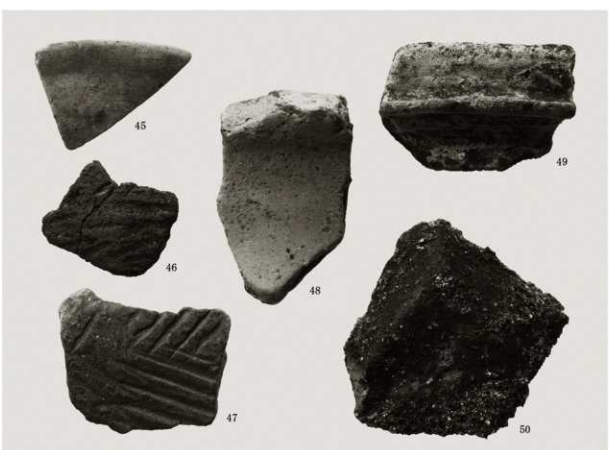
a. 河川040　弥生土器　高坏(21)、壺(22～24)、甕(25)、鉢(26・27)



b. 河川040　弥生土器　甕(29・30)、鉢(31～33)、高坏(34・35)



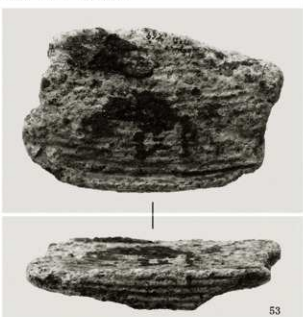
a. 河川040　弥生土器　甕(36・37)、土師器　甕(38～41)、壺(42・43)、高坏(44)



b. 5層　瓦器椀(45)、縄文土器(46)、土師器(47)、4層　弥生土器(48)、土師器(49)、縄文土器(50)

a. 3～5層　弥生土器　壺

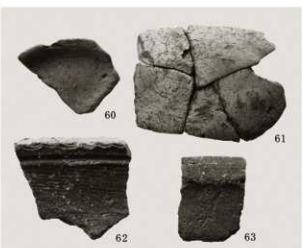
b. 3～5層　鼓形器台



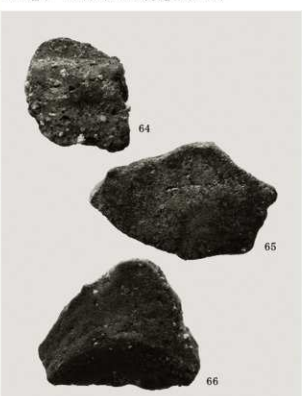
c. 3・4層　弥生土器　壺

d. 3・4層　須恵器(54・55)、瓦器(56・58)、土師器(57)

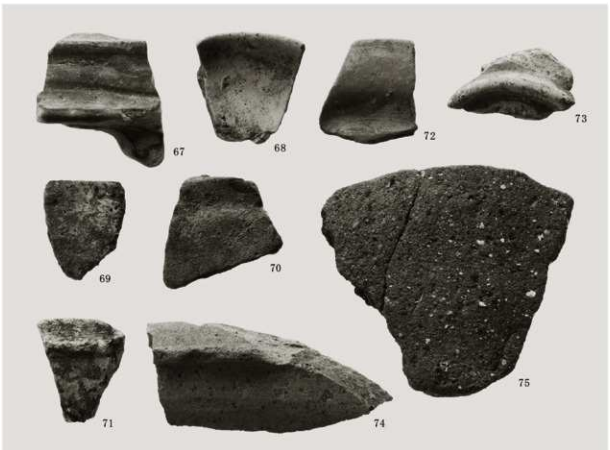
e. 1層　土師器　椀



f. 1層中　土師器(60・61)、須恵器(62・63)



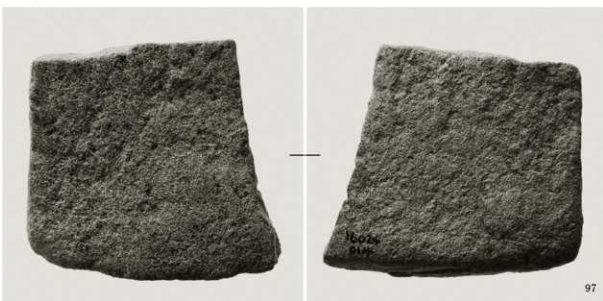
g. 排土　縄文土器(64・65)、弥生土器(66)



a. 遺構出土　縄文土器(75)、瓦器(67)、土師器(68～73)、須恵器(74)

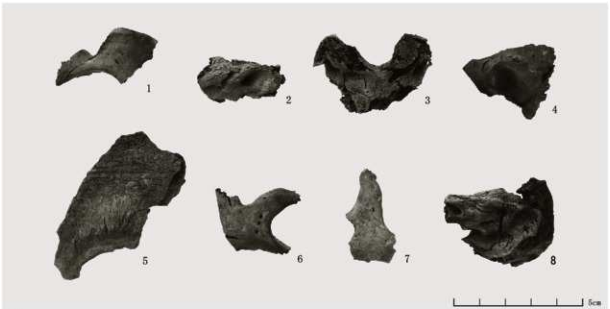
b. 遺構出土　石錐(76)、石鏃(77)、楔形石器(78･90～92)、粘板岩剝片(80)、紅簾片岩石鏃(83)、
サヌカイト剝片(79･81･82､84～89､93～95)

a. 5層　鉄刀(96)

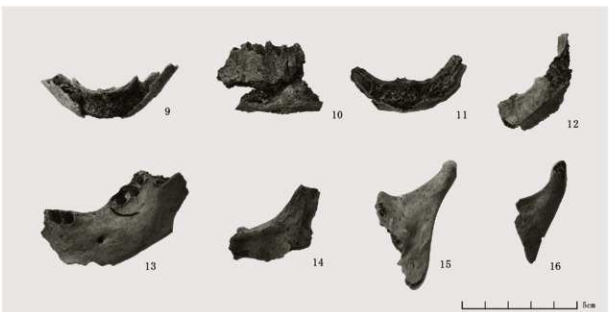


b. 3・4層　砥石(97)

c．排土中　石皿(98)

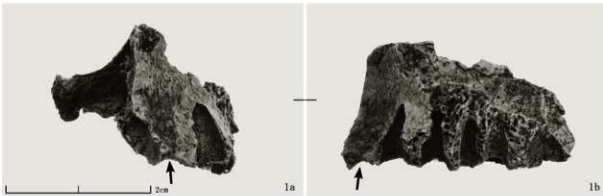


頭骨
1：前頭骨（H155-④-10）、2：左側頭骨（H155-②-3）、3：後頭骨（H155-⑤-19）、4：左側頭骨（H155-③-1）、
5：左頭頂骨（H46）、6：右頬骨（H155-②-4）、7：左頬骨（H154-④-1）、8：右側頭骨（H155-④-5）

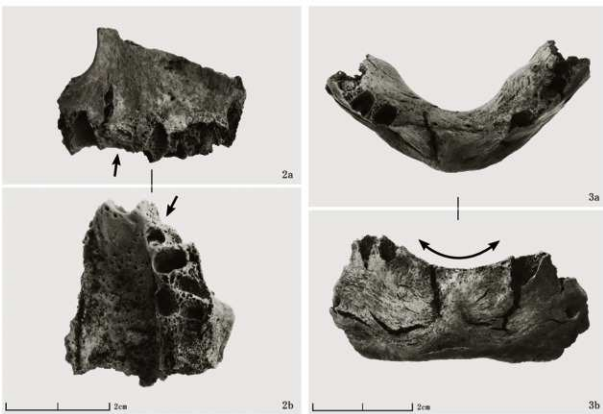


下顎骨１
9：下顎骨（H149-1）、10：下顎骨（H155-⑤-22）、11：下顎骨（H155-②-2）、12：下顎骨（H155-④-6）、13：下顎骨（H155-①-1）、
14：右筋突起（H155-⑤-20）、15：左関節突起（H95）、16：左関節突起（H155-⑤-21）

遊離歯
17：左上顎切歯（H157-歯19）、18：右上顎切歯（H157-歯20）、19：右上顎第１or２大臼歯（H157-歯25）、20：左上顎第３大
臼歯（H157-歯26）、21：左下顎切歯（H157-歯18）、22：右下顎第１大臼歯（H157-歯23）、23：右下顎第２大臼歯（H157-歯
24）、24：大臼歯（H157-歯22）、25：大臼歯（H157-歯21）

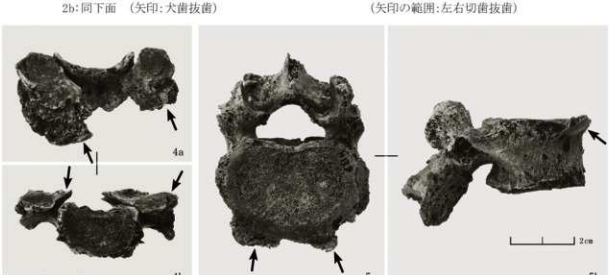


上顎骨 1
1a：左上顎骨（H155-⑤-17）前面、1b：同左側面　（矢印：犬歯抜歯）



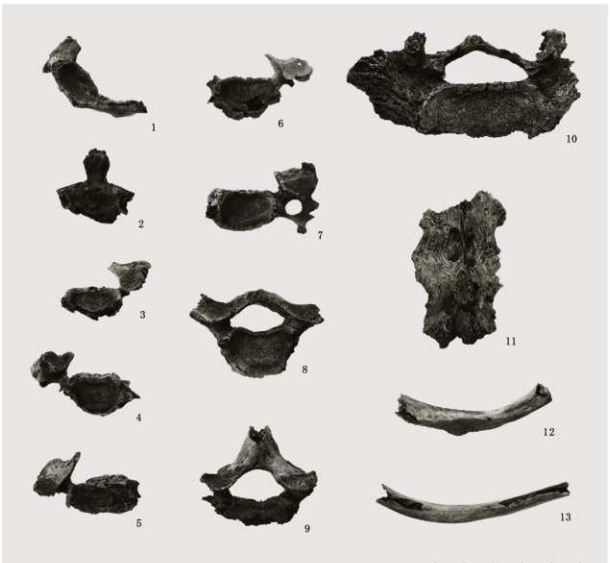
上顎骨 2　2a：左上顎骨（H154-②-4）前面、
2b：同下面　（矢印：犬歯抜歯）

下顎骨 2　3a：下顎骨（H124-1）上面、3b：同前面
（矢印の範囲：左右切歯抜歯）

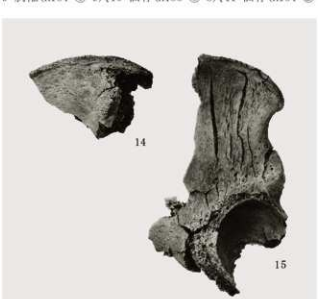


椎骨 1
4a：頚椎（H155-④-14）後面
4b：同上面　（矢印：骨増殖）

椎骨 2
5a：腰椎（H139）下面、5b：同右側面　（矢印：骨増殖）



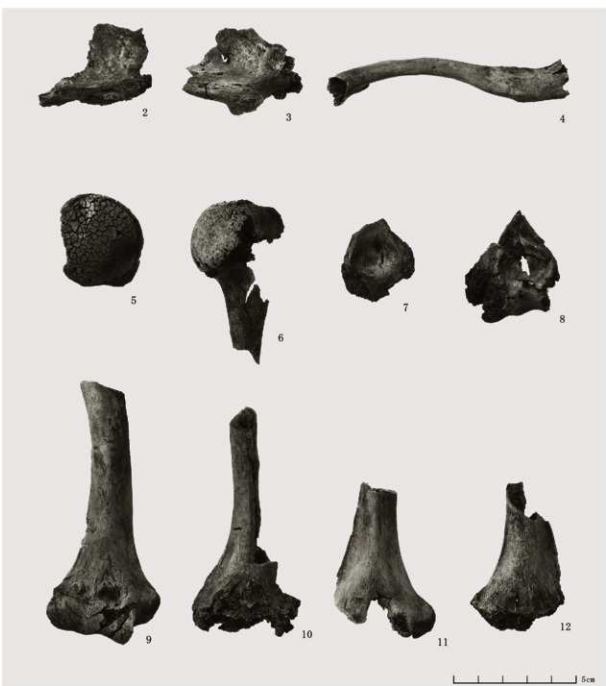
椎骨3・肋骨
1:第1頚椎(環椎,H155-②-7)、2:第2頚椎(軸椎,H155-④-15)、3:頚椎(H155-③-3)、4:頚椎(H155-②-9)、
5:頚椎(H154-④-3)、6:頚椎(H155-④-4)、7:頚椎(H155-④-3)、8:第1or2胸椎(H154-④-2)、
9:胸椎(H154-①-9)、10:仙骨(H155-⑥-8)、11:仙骨(H154-②-7)、12:右肋骨(H130)、13:右肋骨(H22)



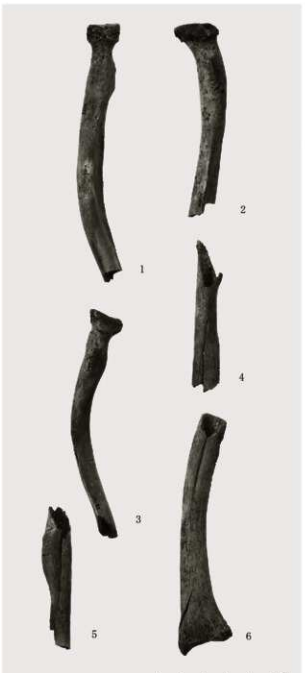
寛骨1
14:右寛骨(H23)、15:右寛骨(H146-1)

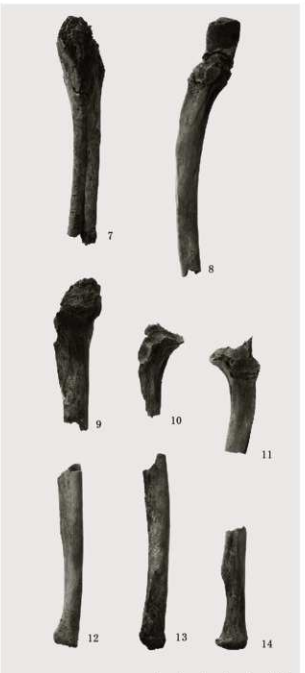
寛骨2
16:右腸骨耳状面(H155-⑥-16)

寛骨 3
1a：右恥骨結合部（H159-1）後面、1b：同結合面

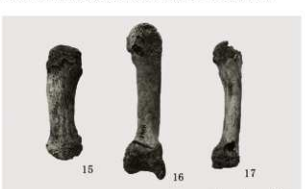


肩甲骨・鎖骨・上腕骨
2：右肩甲骨（H2）、3：右肩甲骨（H118-1）、4：右鎖骨（H142）、5：左上腕骨（H111）、6：右上腕骨（H85）、7：右上腕骨（H155-②-6）、8：左上腕骨（H141-1）、9：右上腕骨（H135）、10：右上腕骨（H155-⑤-1）、11：右上腕骨（H154-①-2）、12：左上腕骨（H154-②-1）



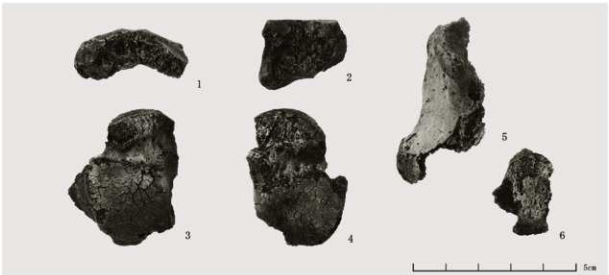


橈骨・尺骨
1:右橈骨(H155-⑤-2)、2:左橈骨(H154-③-3)、3:左橈骨(H155-⑤-3)、4:右橈骨(H146-2)、5:左橈骨(H144)、6:右橈骨(H155-⑥-4)、7:左尺骨(H155-⑤-4)、8:右尺骨(H45)、9:右尺骨(H154-③-1)、10:右尺骨(H102)、11:左尺骨(H132)、12:左尺骨(H126)、13:右尺骨(H1)、14:左尺骨(H121)



中手骨
15:右第１中手骨(H153-2)、16:右第３中手骨(H141-2)、17:右第４中手骨(H123-2)

指骨
18:手指骨(H154-③-7)、19:手の基節骨(H151-1)、20:足の基節骨(H151-2)



足根骨
1：左舟状骨（H158-1）、2：右内側楔状骨（H155-④-1）、3：左距骨（H155-⑥-2）、4：右距骨（H155-⑥-1）、
5：右踵骨（H21）、6：右立方骨（H155-②-14）

大腿骨・脛骨
7：大腿骨（H154-①-3）、8：左大腿骨（H155-⑤-6）、9：右大腿骨（H155-⑤-7）、10：大腿骨（H140-1）、11：右脛骨（H154-②
-2）、12：腓骨（H143）、13：左腓骨（H27）

中足骨（12～17）
14：右第１中足骨（H55-1）、15：左第１中足骨（H155-⑥-6）、16：左第１中足骨（H155-②-12）、
17：左第２中足骨（H138）、18：右第３中足骨（H34）、19：左第５中足骨（H154-④-4）

報告書抄録

ふりがな	にしふくいいせき２
書名	西福井遺跡Ⅱ
副書名	一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2017 － 1
編著者名	岡田　賢（編）・西口陽一・小林義孝・安部みき子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒 540 - 8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2018 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 （㎡）	調査原因
にしふくい 西福井遺跡	おおさかふ 大阪府 いばらきし にしふくい 茨木市西福井 四丁目	27211	71	34° 50′ 49″	135° 33′ 6″	20161101 ～ 20161130	54 ㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西福井遺跡	集落跡・古墳群	縄文時代 中世	土坑 溝群・ピット列	縄文土器・石器、弥生土器・石器、土師器、瓦器、鉄器	縄文時代の土坑から焼けた人骨片が多数出土した。

要　約	縄文時代～近世まで続く複合遺跡。中世の耕作関係の遺構が認められた。縄文時代の土坑が検出され、中から焼けた人骨片が多数出土したことが特筆される。

大阪府埋蔵文化財調査報告 2017-1

西福井遺跡Ⅱ

―一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会
〒 540-8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06 - 6941 - 0351（代表）
発行日　平成 30 年 3 月 31 日
印　刷　株式会社ミラテック
〒 534-0025　大阪市都島区片町二丁目九番九号
TEL 06 - 6354 - 3081（代表）